

---

# 『エデン』～三つの瞳～

ドラゴンツリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『エーテン～三つの瞳～

### 【Zコード】

Z8468C

### 【作者名】

ドラゴンシリー

### 【あらすじ】

異世界エーテンには、三つの瞳の言い伝えがあった。一つ目は魔眼と称される闇の瞳、二つ目は邪眼と称される死の瞳、三つ目は聖眼と称される光の瞳、恐るべき力を秘めたこれらの瞳は古い文献には、その存在はしつかりと書かれていたがそれらの瞳がどのような力を持っているのかは書かれていなかつた。あるはずのないものには人々の関心はいかず・・・その伝承はどこかの書庫の奥へとしまわれてしまい・・・この世から姿を消した。

## プロローグ

この物語の舞台となる世界は地球とは異なつた文明を発展させた世界『エーテン』

魔法使いや獣人や幻獣など存在が在り得ないものでさえ存在する。誰一人この世界から拒まれはしない・・・そう誰一人として・・・。

物語が始まるのは、帝国と呼ばれる世界屈指の戦闘力を有する戦闘国家『レー・テン』の兵士とその帝国の時代を終わらせようとする者達の集まり『レジスタンス』との戦場・・・。

次から次へとレジスタンスの兵士が、帝国の兵士が消えていく。初めは分からなかつた・・・なぜなら両部隊の兵士とも悲鳴をあげるまもなく忽然とその存在を無くしていったからだ。

そしてある時帝国の兵士は気付いた、周りの所々に鎧が脱ぎ散らかされていることに、兵士は逃げたのかと思いその旨を軍の指揮をしている将軍アルマに伝えた。

だがアルマは困惑した。それはアルマのいる場所は戦場を一望できる様な高い丘で見ている限り逃げた兵士などいなかつたからだ。

その時アルマは気付いた、相手の方でも同じ事が起きていることに・・・。

アルマは目を凝らして兵士達全てを見た。すると兵士の一人が鎧を残し突然消失した。

驚いたアルマは兵士達の足元を動く影に気が付いた、そして全ての兵士を一度撤退させた。

そしてアルマは単身で戦場に踊り出た。

それを見たレジスタンスのリーダーエルリスも一度撤退を命じ馬へ騎乗し戦場へと出た。

「何を考えているアルマっ！！」

エルリスは警戒したまま一定の距離をとっていた。

「静かにしろっ！！今はそれどころではないっ！！」

そういつた瞬間アルマは手に持っていた槍を手に短い言葉を呟きエルリスの方向へ放つた。

ついに動いたかつ！！と思つたエルリスだが槍の方向が変わった・・・

・エルリスの立つてゐる地面へと

しかし槍は地面に刺さることなく黒い何かに吸い込まれた。

「捕らえたぞっ！！爆ぜろっ！！」

アルマの合図で黒い何かは爆発をした。

エルリスはアルマに状況を説明するようになつた。

「お前は我等の周りにある鎧を不思議だと思わんか？」

その時エルリスは初めてその異変に気づいた。

「先ほどの黒いものが兵士を消してゐた・・・それも無差別にな

「そうか・・・礼を言わせてもらおう、助かつた」

「礼はいらん、我は貴様との戦いをあんなものに邪魔されたくは無かつただけだからな」

「では・・・決着をつけるか・・・」

「望むところだっ！！」

そしてアルマは何処からか槍を取り出し攻撃を繰り出そうとした。エルリスは腰に提げたレイピアを抜いた。

だが一人の戦いはまた中断させられる事となつた、何故なら一人の間に黒い物体が現れたからだ。

「また邪魔が入つたか・・・今度は私が行くぞっ！！」

するとエルリスはレイピアの切つ先を揺らし始めた。

「全てをなぎ払え、雄雄しき風よっ！！」

エルリスは叫ぶと同時にレイピアを突き出した。レイピアの切つ先

からは大地を抉るほどの暴風が放たれた。

暴風はそのまま黒い物体を飲み込んだ。すると黒い物体にはひびがありそのまま崩れ落ちた。

落ちた黒い欠片は溶ける様に消えた。そして風が止み土煙が晴れてきた時に黒い物体の中にあつたものが現れた。それは、人間・・・漆黒の黒衣を着ているために顔や正確な体型が分からず性別も判断できなかつた。

唯一つ見えたものと言えば、不気味に黒光りする漆黒の瞳だつた。

「な、何者だつ！！」

エルリスはその者に問い合わせるが何も答えない、そこへ二人の戦いを見ていた兵士は二人の戦っていた理由が分かりその者を敵と判断した。そして兵士達は帝国、レジスタンス問わずその者へ突撃していつた。

そしてその者は初めて口を開いた「影よ・・・舞え」その言葉は小さく呴かれたものであつたが・・・二人の耳にはしつかりと刻まれた。

言葉が終わると同時にその者の影から太い針のような影がいくつも伸びた。

その針を見た二人・・・エルリスとアルマは怒鳴つた「逃げる」としかし判断が遅すぎた・・・場の全ての者に襲い掛かり・・・針は兵士達の鎧を水に濡れた和紙の様に貫き殺戮をした。

二人は殺戮を止めようと彼の者に迫つたが、一人の攻撃は影によつて防がれた。

数十秒後影は動きを止めた。

「生き残つたんだ」

不意にその者は声を発した、それは少し幼さの残る声だつた。

「もう・・・会わない様に祈つていてね」

その言葉を最後にその者は影に吸い込まれて消えた。

後に残つたのは多くの死体と一人の生存者と静寂だつた。

## 第一幕

陽気な天氣の下に寝転がっている青年がいた、全く持つて幸せそうな寝顔をしている。

だが彼の平穏も残り数秒だろう・・・なぜならガントレットを装備しかなり怒っている女の子が立っているからだ、

「起きろおおおおおつっ！」

その言葉と共に鋼を纏った拳が青年の鳩尾あたりにめり込んだシャレにならない角度と位置と力で炸裂した拳は成人男性でさえ悶絶させることなどが容易かつた。

しかし幸か不幸か彼は些か頑丈だった。その拳を受けても気絶することなく目を覚ましてしまったからだ、そして女の子と目を合わせ・・・もう一度殴られたのであった。

「目がチカチカする」などと言って頭を抱える青年、その横で歩いているのは殴った張本人である女の子・・・実はこれは毎度の事で会つたりする。

この青年ルークは実は魔法の学校へ通っているのだが低血圧というわけでもないが朝に弱くしかもいつ何処で寝るか分からないよつて遅刻や欠席をする・・・そんなルークに頭を抱えた教師が宛にしたのがルークが頻繁に寝ている場所の近くに家がありクラスメートであり生徒会と呼ばれる魔法のエキスパートで学校の風紀を守る風紀委員である彼女シルフィであった。

彼女は連れて来さえすれば何をしてもいいという条件でルークを起こすもといルークを殴る権利を手に入れたのであった。そして毎朝ルークの居場所を探査して見つけ出し殴り起こしているのだった。

「起こしてくれるのはありがたいんだが・・・もう少し優しく起こしてくれないか？」

懇願するルークだったがその提案はあっさりと却下された。

そういうしている間に学校に着いた、一人はクラスへと向かつた。

午前中の授業が終わつた後ルークは屋上で昼食を取つていた。ルークはあまり人と付き合いが上手くは無く授業中もボーッとしていた。そんなルークに友達が出来るはずも無いくつもルークは一人で昼食をとつてゐる。

そしてルークは昼食を食べ終わると次の授業・・・実技の授業のために外へ出て行つた。

外では何人かの生徒達が練習を始めていた。

ルークはハアーと溜息をつくと木陰に移動し寝始めた。数分後シルフィに殴られて目を覚ます、腹を抱えながら立ち上がりと生徒が全員揃つていた。

どうやら授業が始まつたらしい・・・更に数分後教師の長つたらしい説明が終わり模擬戦は開始された。

ルークの相手はラウという男子だつた・・・能力的にはシルフィに引けは取らないが乱暴な正確なせいで生徒会や風紀委員に採用されなかつた生徒である、開始の合図でラウは地面へ手を当てた。するとルークを囲むように氷の柱が生まれた。柱はしだいに数を増しやがて壁となつた。そしてラウはそのまま壁をドームのようにしルークを氷のドームへ閉じ込めた。

数分後凍死寸前となつたルークが歯をガチガチ言わせながら教師に助けられて出てきた。

そんなルークを哀れみの目で皆見ていた、普通なら負けた相手を哀れむ事はしない者達なのだが今回は違つた。何故なら対戦の組み合わせがかなりの実力者のラウとクラスでもつとも弱く魔法が使えないルークだつたからである。

公開処刑のような戦いだつたわけでルークへの哀れみの視線がより一層強くなつた。

そんな感じで学校が終わりルークは少しだるい体を引きずりながら

自分の家に久しぶりに帰った。

ルークは一人暮らしで両親はいなかつた。二年前までは育ててくれたじいさんがいたが今では死んでしまっている。

ルークは水を一杯飲むとそのままベットに入り寝た。

次の日ルークはシルフィに起こされる前に起きた。もう一眠りしようかと時計を見てみたすると時間は十一時だった。もう昼だと言うことよりもルークはシルフィが起こしに来なかつたことに驚いた。カーテンを開けてみると太陽がしつかり昇っていた。

急いで学校に向かつたルークは爆音を耳にした、その音はかなり近く学校の方向から聞こえていた、

妙な胸騒ぎを覚えたルークは更に足を速めた。

ルークが学校へ着くと三つの焼死体を発見した、焼かれ方で一撃で仕留めた分かり少し感動した。

ルークが中に入ると生徒と教員が全て校庭の実技を行うための場所に集められていた。

その中にはシルフィとラウの姿もあつた。

気付かれないように位置取りして見ていたルークは犯人と思われる四人の魔法使いを見つけた。

それぞれが相当な腕の持ち主のようだつた。

どうしようかと考えていると犯人の方へ自分と同じぐらいの歳の女の子が歩いていった。その子は、学校の生徒というわけではないようだつた。

そして驚いたことに犯人達はこの女の子に見覚えがあるようだつた。  
「こりや驚いた・・・まさかこんな場所であんたに会えるなんてな」  
少し驚いたように犯人の一人が話し掛けた。だが話を遮るように女の子の背後から兵士が三十人ほど現れた。

女の子が攻撃命令を下すと兵士が犯人へと向かつて行つた。だが彼

女は知らなかつたこの男以外の三人はいざ知らずこの男は三十人程度で倒せるような男ではなかつたことを、男はニヤリと笑うと軽く詠唱した。

「我が願うは地獄の業火」

すると地面が裂けそこから勢い良く炎が噴出した。

炎は兵士を一飲みにし地中へと帰つていつた。

「なつ！力を見間違えましたか・・・。」

悔しそうに女の子は呟いた。

「さあ・・・帝国のナイア姫、一体なんであなたがここにいるかは知らないが・・・。『焰』の一いつ名を持つ俺にたつたそれだけの軍勢で勝とうなんて甘すぎだろ？」

「『焰』！？・・・なんでそんな大物がここに・・・。」

「何でだろうなあ？」

挑発めいた笑いがナイアを刺激した。

「あなたは・・・絶対に倒しますっ！」

そう言つて取り出したのは短いロッドだった。

「水よつ！？その奔流をもつてなぎ払えっ！」

するとナイアの背後から濁流が流れてきた。

「へえ・・・やるじやん」

だが不意に現れた火球によつて濁流は全て蒸発させられた。

「さてと・・・お返しと行くかあつ！」

そう言つて再度火球を生み出しナイアを襲おうとした時だつた。焰は詠唱を何故か止め背後へと飛び退いた。訳の分からぬといつた感じの三人の魔法使いだつたが三人が三人とも次の瞬間何かで心臓を貫かれた。

「え？」

分からぬといつた感じの生徒と教員とナイア、だが焰はしつかりと相手を見据えていた。

漆黒の黒衣に異常なまでの霸氣を感じさせる黒き瞳その風貌を見て全てのものが言葉を失つた。

「お前は誰だ？」

しかし彼の者は何も答えない、焰も軽く微笑むと次の瞬間剥き出しの殺意を露にした。だが彼の者は全く動じない、それどころか何故かこの雰囲気を楽しんでいるような気さえしてしまいそうになる。

「何ももう聞かないぜ・・・どうせこいつお前は・・・死ぬんだからなつ！…」

そう言つて焰は唱え出した。

「地獄の業火を超えた冥府の劫火よつ！…我が前に立ちふさがる愚かなる者を・・・殲滅せよつ！！」

そう言つて焰の体から纏わり着くようにして紫の炎が表れた。炎は見るだけで生氣を失いそうになるほど禍々しさを持っていた。

「消えちまえつ！！」

掛け声同時に紫の炎が彼の者を焼き尽くそうとした。だが彼の者は全く動かなかつた。

そして炎が直撃した・・・だが彼の者は平然と炎の中で立つていた。

「こ」の程度の炎が・・・冥府の炎か・・・。」

その言葉はどこか悲しそうだった、焰は自分の最大級の攻撃が全く聞いていないことに驚き彼もまた相手の実力を読み違えてしまつたと後悔した。

「死神の裁き」

彼の者がそう唱えると影より三体の死神のような者が現れた。焰は逃げようとしたが何故か体が動かなかつた。背後を見ると黒い十字架に一つの間にか張り付けにされていることに気がついた、そして焰は三体の死神によつて数十個もの肉魄へと解体された。

全てを目撃した後軽く笑つて彼の者は消えた。

戦闘が終わりナイラは学校の一室を借りて休んでいた。

「何なの・・・何なのよあいつ・・・。」

そう言つてナイアは思い出しだけでも寒氣がするといった感じで顔を真っ青にしていた。

そんなナイアの所にルークはココアを持って現れた。

「大丈夫ですか？」

差し出されたココアを受け取り軽く礼を言つてココアをすすつた。何故かココアは不安な気持ちを温めてくれた。

ナイアはそこで深く考えるのをやめた。何故なら他にやることがあつたからだ、皇帝である父親への報告書である。いつもはあまり書くことは無いが今日は違つた。三十人の兵隊を焰に会つて全滅させられたことと、その焰を漆黒の黒衣を来た何者が倒したこと。それを書かなければならなかつた。

そして報告書を書き終えナイアは自分がここへ来たことを説明しようと部屋から出て行つた。

## 第一幕

ナイアは魔法学校の生徒と教員を体育館のような広い施設に集めた。壇上に上がるナイアを全ての人が注目した。そしてナイアは決意したように話しかけ始めた。

「私は戦闘国家レーーデンの第一王女ナイアです。このような場を借りて挨拶することをお許しください・・・。今回私がこの土地へ来た理由は、先日この近くの平野で私の国の部隊とレジスタンスの部隊が交戦し連絡が途絶えてしまったからです。普通はそのような事態が起きたとしても部隊が壊滅したと言う事で済ませるのですが、その部隊を指揮していた者と言つのが私の国の四大將軍が一人『朱雀』のアルマなのです。彼に限って負けることはありえませんがもしかしたら手傷を負つているかもしれないと言うわけで来たのです・・・。ですが私の守護のために着いて来た兵士達は皆先の戦いで死んでしまいました。そこでお願いがあるのです、生徒か教員の方の中で手伝いをしてくださる方はいませんか？」

そう言つてナイアは口を閉じた。だが語られた話はおおよそ信じられない話であつた、そんな困惑した人々の中シルフィーが教員の近くへ行き「私がやります」と言つた。

その言葉に釣られたのか実力のある生徒が次々と参加を希望した。純粋な気持ちからやううと思つたものもいたが多くの中には下心が見え隠れしていた。

しかしながら世間と言つものあまり知らないこの姫君は、素直にこの誠意を喜んだ。

そんな中シルフィーがルークに言つた。「あなたも来なさい」と始めは渋つていたが、殴られそうになつたのでルークは「わかった」と小さく言つた。

そしてその後出発の時間を決めた、出発は夕方だった。

夕方ルークは水などを適当にバツクに放り込み集合場所へと急いだ。集合場所には多くの人が集まっていた。その中には、やはりシルフィの姿もあつたついでにラウの姿も、参加した生徒の数は三十六人その一人を除いたほぼ全ての者が卓越した魔法の腕を持つていた。戦力的には十分といった。

そして護衛対象であるナイア自身も負けず劣らずといった実力を持つていた。食料も馬車に積み終え一行は戦闘のあつた平野へと向かつた。平野までの道のりは九十キロほどだった。

一日目は軽く歩いて十キロほど進むと考えて二日目からは一十五キロペースで歩くとして五日目に着く計算となつた。

そして計算通り十キロほど歩いたところで一行は夜を明かした。

二日目一行は道無き道を進んでいた。所々に馬車を通れないところを魔法などで開拓し進んでいった。

昼頃には道は拓けて来た、だが事件はその時に起きた。

いち早く気が付いたのはシルフィだった。空の風に異変を感じ見上げてみると空にワイバーンと呼ばれるような前足の無い小型のドラゴンが現れたのだ。一行は魔法を唱え始めたがワイバーンは速かった。俗には、速すぎて遅く見えるなどと言う言葉があるがそれは違う速すぎると消えてしまうのだ。

一陣の風となつたワイバーンはあるう事かナイアに襲い掛かつた。大木をやすやす噛み千切る顎に襲われそうになるナイアだったが突如ワイバーンの左目に礫つぶがあたつた。進む方向が少しズレ地面に頭からダイブするワイバーン動きが止まつたのを見計らい生徒達はありつけの魔法をワイバーンにぶつけた、水や火や雷などが猛威を奮いワイバーンをこの世から消滅させた。

そしてようやくナイアは気が付いた。礫を投げたのがルークだと言うことにだが生徒はそのルークの絶技に全く気付いていなかつた。それどころかナイアがワイバーンを地面に叩き落したのだと勘違い

さえしていた。そのことについて問い合わせようとルークのところに行こうとしたがルークはシルフィに呼ばれ片付けに行き、ナイアは「先ほど技は何なのか」など質問攻めにあつていた。「ルークが礫でやつたのだ」と答えたが笑つて返された。

そして一田目も終わりを告げた。

三田目はそこまで酷い道でもなく今までの中では天国のようだったりんごを齧りながらルークはみんなの後をついていった。

そして四田目何故か三田目にかなりの距離を進んでしまい目的地まで十五ほどとなっていた。そのことを生徒へ伝えるとなら今日中に行つてしまおうという事になった。少し進むのが速くなる一行そして一行は目的地へとついた。

目的地はまるで地獄だつた、見渡す限りに腐乱した敵味方の兵士達の死体と黒く渴いた血の痕があつた。その光景には流石のシルフィとラウさえも目を覆い顔を青くした。

だがそこでナイアはあることに気が付いた、それは敵味方とも同じような傷跡が鎧に付いているということだ。少し考え込んだナイアだがルークが「その将軍さん・・・大丈夫かな」と呟いたのでナイアはすぐさま考えるのを止めアルマを探した。

アルマの姿は何処にも無かつた、そこでナイアは奇妙な安心感を覚えた。それは『アルマが死体の中には無く生きている』という気持ちと『ならばどうして連絡が途絶えたのか?』という気持ちからだつた。

その夜一行は死者達の墓を作り、そこで一夜を明かすこととした。テントを張り終わり料理を作ろうとしたときだつた。急に突風が吹き荒れテントを吹き飛ばした。

何が起こったのか訳もわからず生徒達は困惑した。そして月明かりに照らされて十数匹ものワイヤーベンが現れた。十数匹ものワイヤー

ンの無慈悲なる爪や牙が一行に襲い掛かろうとしたときだった。

「生まれる、氷の双璧よ」

ラウがそう唱えると氷の壁がワイバーンの前に一枚立ちはだかった。続けてシルフィイが

「歌い、踊り、狂えつ！－風の大牙よつ！－！」

そして形成されたいくつもの風の刃がワイバーンを襲った。

つまり冷静になればそれほど驚異的な敵ではなかつたのである、敵は防御力の高い敵というわけではないただ速さがあるだけの敵なのである。

何処か外来種であるヘルワイバーンやロックワイバーンならともかく通常のワイバーンなんて物の数ではない、したがつて動きを一瞬でも止めその隙をつければ難なく倒せる敵なのである。

そしてワイバーンとの戦いは終わつた。奇跡的に手傷を負つたものはおらず皆無事だつた。

その時忍び寄る気配を風を通じて感じたシルフィイがその存在に向かつて風を放つた。

だが風は目標に近づくにつれ弱くなり最終的に微風となつた。

「なかなか面白い歓迎だね」

そう言って現れたのはレジスタンスのリーダーエルリスだつた。

## 第三幕

「エルリス！？レジスタンスのリーダーが何故ここに……。」

ナイアは驚きつつも攻撃態勢をとった。

「アルマ殿を預かっている、付いて来なさい」  
そういうとエルリスは身を翻し戻つていった。

「罷か？」

ラウが目を細めてエルリスの行った方向を眺める。

「罷かどうかは行つてみないと分からぬいし……とりあえず行かないか？」

ルークがそう言つと肯定の返事がちらほら上がり、一行は付いていくことに決めた。

エルリスと微妙な距離を取りつつ付いて行くと突然少し離れたところでエルリスは止まった。

そして何もない空間に手を差し出すと”ギイ”つという音と共に空間に穴が空いた。するとその空いた周りが次第に色をもち始め扉が見え、壁が見え、巨大な建造物が見えた。

エルリスは振り返り一行にこう告げた。

「ようこそ……レジスタンスの本拠地『インビジブルガーデン』へ」

一行は誘われるままに建造物へと入つていった。

そしてそのまま一つの部屋に案内された。エルリスは扉を開けて招き入れる。部屋にはいくつかベットが置かれてありその一つに包帯を巻いた男がベットの上で本を読んでいた。

「アルマッ！」

ナイアは叫ぶと共に駆け寄つた。アルマも声に気付き一礼する。

「姫……何故このようなどころに……。」

アルマは何故か悲しそうな顔をしていた。

「何故つて……お父様が捜索隊のリーダーに私を選んだの」

「皇帝は何故姫を……。」

「それは……。」

何かを言おうとしてナイアは口を閉じた。アルマもそれ以上追求をしようとしなかった。しばらく沈黙が続きナイアが口を開いた。

「しかし何故その傷を負ったのですか？やはりエルリスに……。」

そう言ってナイアはエルリスに睨んだ。

「いえ・・・今回私の傷や兵達の全滅には、最初の戦い以外レジスタンスは関与していません。」

「意味がよく分かりません・・・あなたの部隊の任務はレジスタンスの討伐だったはずです。」

「それについては私から話しましょう」

今まで部屋の外にいたエルリスや生徒が入ってきた。

「ではアルマ・・・動けますか？」

「ああ・・・行ける」

アルマはエルリスの肩に寄りかかりながら歩き一行もそれに付いていった。少し歩くとかなり広い空間にたどり着いた。そこには微妙に服装や鎧の違う多くのレジスタンスの兵士達が集められていた。

「少し行ってきます、君達はここにいてください」

と言い残しエルリス空間の中央に向かつて行つた。

「皆も今日ここに連れてこられたのは驚いていると思います・・・。ですが聞いてくださいもしかしたらこの中の何人かは噂で聞いたことがあるかもしれません、数週間前この近くで帝国軍との戦闘がありました。」

そして激突し合うアルマの帝国軍とエルリスのレジスタンスが鮮明に映像として映し出された。どうやら魔法で記憶を映像にしているようだ。

「この帝国軍を指揮していた者は彼の帝国軍の猛将『朱雀』のアルマでした。そしてレジスタンスを指揮していたのはこの私でした。そして私は全ての兵を失つて敗北しました。」

一瞬兵士達にどよめきが走る。

「ですが普通の戦闘で敗北しただけならば皆さんを呼ぶよつな」とはしません」

そしてナイアとアルマの方向へ向

「ここで問題なのは帝国軍も全ての兵を失った事です。」

兵士達は意味が分からぬといった様子だった。

「実は帝国軍の本隊とレジスタンスの本隊がぶつかる前に第二者の介入がありました。」

そして映像が変わった時ナイアは驚愕した。

「嘘・・・なんであいつがここに」

掠れた様な声だがアルマにはしつかりと聞こえた。だがここでは問いただそうとしなかつた。

その映像とは漆黒の黒衣に身を包んだ者が黒い塊から出てきた映像だつた。

「問題はここです・・・この漆黒の者が正体を現したことで帝国軍とレジスタンス双方の兵士が勢いづきこの者に襲い掛かつた場面です。見てみてください」

そして次に映し出されたのは影から出た針が兵士達を次々と貫いていくという惨劇だつた。

「結果がこれです、憶測ですがこの者は闇系統の魔法を使ようですが皆さん知つてのとおり闇系統の魔法は珍しい、私も今回始めてみた。一体どのような攻撃を仕掛けてくるか分からぬが一つだけ皆さんに忠告をします・・・奴に会つたら逃げてください」

話が終わると兵士達は黙り込んだ、皆どうすればいいのか分からぬ様子だつた。

そして解散の前にエルリスは一言付け足した。

「それと奴に生半可な魔法は通じないから絶対立ち向かおうとしないように・・・じゃあ解散です」

兵士達の足取りは・・・重かつた。

兵士達が続々と帰つていく中ナイアと魔法学校の生徒達は取り残されていた。

そこへエルリスが戻ってきた。エルリスの後ろには生徒達と同年代と思われる青年と女の子がついていた。

「さて、さつきの説明で分かったと思いますが・・・アルマの怪我は闇の魔法使いが原因です。」

「それは分かりました・・・しかし疑問が残ります。何故あなたはアルマを助けたのですか?」

エルリスは少し考えるような仕草をしてから言った。

「なんとなくです」

何の答えにもなっていなかつたがしづしづナイアは引き下がつた。  
「おお、そうだ忘れていました。先ほどから私の後ろにいる青年はルウ、女の子の方はメイ、二人ともレジスタンスの構成員で戦闘の腕だけならそこら辺の部隊長にも負けません・・・だが世間というものを知らなすぎなので、この機会にアルマを帝国に送る際の護衛として連れて行ってくれませんか?」

突然の申し出に驚いたナイアだがどうすればいいか分からなくなりアルマに目でどうしたらいか問い合わせた。

「連れて行く分にはいいと思います。」

アルマがそう言つたのでナイアも了承した。

「では一人とも外の世界でしつかり勉強してきなさい」

エルリスの言葉に二人はしっかりと頷いた。

二人を連れて戻ろうとした時に連れてナイアは先ほど伝えようとしたことを思い出しエルリスに告げた。

「そういえば先ほどの話で出た闇の魔法使いですが・・・この近くの村の魔法学校で五日ほど前に現れましたよ?」

その話を聞いてエルリスは詳しく教えてくれと頼んだ。

そしてナイアは焰と名乗る男に三十人の兵士を焼き尽くされたこととその後に出てきた闇の魔法使いが焰を簡単に殺したことを継げた。

「影から死神・・・そんなことも出来るのですか・・・」

エルリスはブツブツ言いながら何処かへ行ってしまった。

残ったナイアとアルマとルウとメイと背後で集まっている魔法学校

の生徒は、呆然とその様子を見詰めていた。

その時だつた。緊急時になるようなサイレンが鳴り響いたのは、それと同時に急を知らせる放送が聞こえてきた。

『現在グリフォンと思われるモンスターの大群と大型のモンスター五体がこのインビジブルガーデンの上空で確認されました。戦闘員は至急第三ゲートへ集まつてください。なお非戦闘員はシェルターへの非難を急いでください』

その放送を聞いたときアルマの顔色が変わった。

「グリフォンだと!? ならば大型のモンスターといつのはブルードラゴンかっ！」

ドラゴン・・・モンスターの中でも最も討伐の大変なモンスターの一つで、鋼よりも固い鱗と万物を引き裂く強靭な牙と爪を持つ大型モンスター

アルマは動かぬ体を無理やり動かし外へ行こうとした。だがやはり無理があるのか数メートル進んだところで倒れてしまった。

「アルマ無理をしないでください、戦闘は私がしますから」

そう言つてナイアは行こうとしたがシルフィに止められた。

「ナイアさん、一人で行くつもり？」

変わるようにしてラウも言つた。

「一人よりも皆で行つたほうが戦力になるだろ？」

そうしてラウは後ろを向き生徒達の方を見るが生徒達は顔を青ざめ首を横に振つていた。

「・・・情けねえ・・・」

そう呟くとラウは「まあ一人よりも三人の方がいなよりはマシだよな」とナイアに言つた。

そこで口を挟むようにしてルウが三人に言つた。

「じゃあ僕達も行きます。レジスタンスの問題ですし」

そしてメイも頷いた。

「そうと決まれば行こうぜ・・・って第三ゲートって何処だ?」

「いづちですついて来て下さい」

三人はルウとメイに誘われるままについて行つた。

その様子を見ていたルークがボソッと呟いた。

「全く・・・どうしてあいつ等は危険が好きなんだよ・・・しかし  
流石にブルードラゴンが五体も相手となると加勢が必要だよな・・・  
」

そしてルークは誰にもばれないように何処かへ消え懐から漆黒の黒  
衣を取り出した。

## 第四幕

第三ゲートには、何百人の兵士達が集まっていた。ナイア、シルフィイ、ラウ、ルウ、メイもその中に混ざっていた。

そして少し怖いスキンヘッドの男が作戦の説明をし始めた。

「敵のグリフォンの数は四百弱……こいつ等は気を付けてさえいれば楽に勝てる相手だが……問題は先ほどの放送であつた大型のモンスター五体のほうだ、調べた結果やはりブルードラゴンだということが分かった。皆分かっていると思うがブルードラゴンの最大の特徴は雷のブレスだ。そしてブルードラゴンには生半可な武器では傷さえも付けられない、よってブルードラゴンの相手は各支部の隊長と副隊長クラスと魔法の使える者がやることとなる。よって魔法の使える者でブルードラゴンと戦つても良いということ者は私のところへ来い、以上だ」

そしてスキンヘッドの男の近くに人が集つていった。

「私たちも行こう。」

シルフィイがそう言つとルウとメイが止めた。

「それは駄目です。流石にブルードラゴンの相手は無理です。」

「そうですよ！私たちは、エルリス様からあなた方の護衛を頼まれているんです。グリフォンならともかくブルードラゴンが相手だとそんな暇はあるかこちらが先に死んでしまいます。」

あまりの勢いに押されたシルフィイだがこんなことでは流石に引き下がらなかつた。

「違うわ、あなた達が護衛を頼まれたのは私たちではなくナイアとアルマだけのはずよ。」

そこへラウが口を挟んだ

「でも自殺願望者を止めるのは普通だと思ひぜ？」

「ラウ……あんたもそっちの味方なの？」

「敵味方の話じゃない、いくら俺たちが才能を持つていても

それは同年代での話だろ？しかも俺たちはドラゴンの千分の一ぐら  
いの強さのワイヤーバーンでさえ多少てこずつたんだ。簡単に言うとド  
ラゴンの力は俺たちから見れば規格外なんだよ。」

そこにはいつものふざけているラウの面影は無く真剣そのものだっ  
た。

「でも・・・。」

「でもじゃねえ、俺たちは俺たちのできることをするそれで良いん  
じゃないか？」

そう言つてラウはいつもの顔に戻つた。

「そうですよシルフィイ私たちの出来ることを・・・しましょ  
うナイアも諭すように言うとシルフィイは渋々ながら頷いた。

丁度その時第三ゲートのゲートが開いた。

「始まるみたいだな・・・よし固まつていこうぜ」

ラウがそう言つと皆が頷いた。

そしてスキンヘッドの男と隊長、副隊長クラスの者や魔法使いの者  
達が先行して出て行つた。遅れること十数秒他の兵士達も出て行つ  
た。

外に出たルウとメイ以外の三人は圧倒された。空を覆う黒い影の大  
群、そして先行した者達が向かつて行つたところに光り輝いた青白  
い閃光、その全てに三人は圧倒されたのだ。  
ねつとりとした唾が口の中に纏わりつき喉がカラカラに干からびる。  
そして三人は気付いた。

『これが本当の戦いなのだと』

しかしボーッとしている暇を相手はあまり与えてはくれなかつた。  
空から降りかかるグリフオンの爪が地上の兵士達に襲い掛かつた。  
シルフィイはすぐに我に帰りガントレットをガリツと合わせる。ナイ  
アは短いロッドを手に持ち、ラウは短い棒を懷から取り出し組み合

わせ戟を作り出す。ルウは赤と青の双剣を取り出し、メイは気合が  
出るからと言つてマントを羽織った。

シルフィイは軽く詠唱をした。

「我は風・・・風は我・・・我に風の恩恵を  
そう言つとシルフィイの体が浮いた。シルフィイはそのままグリフオン  
に向かっていきすれ違ひ様に二匹のグリフオンを殴つた。  
物凄い音を響かせながらめり込んだ拳は一発だつた、だがグリフオ  
ンの体には、三発殴られた後があつた。

「風の恩恵つて速度も上げるのか・・・いいなあ」

などとラウがぼやいているとグリフオンが前後左右と頭上の五方向  
から襲い掛かってきた。

ラウは檄をまわして前方のグリフオンの首を刈り取り勢いをそのまま  
にして右側のグリフオンの首も刈り取つた。

一回転させた時前後左右のグリフオンの首が宙に舞つた。だが頭上  
からのグリフオンが数センチの所まで迫つていた。

「あ～らよつと」

気が抜けるような声と共に横に避ける同時に地面にグリフオンが落ち  
ちてきた。そしてブォンという風を切る音と同時にグリフオンが腹  
から真つ二つになつっていた。

その頃ナイヤはたつた一体のグリフオンに対し

「水よつ！－その奔流をもつてなぎ払えつ！」

などと言う大技を使い味方とも敵をなぎ払つていた。

その様子をやれやれといった感じで見ているルウとメイの周りには  
血だまりが出来ており、そこにまた七体のグリフオンがやってきた。  
「じゃあルウ次のグリフオンで多く倒せた方に少なかつた方がアイ  
スおこるなんてどう？」

「戦いを賭けにしちゃ駄目だろ？」

「よいスタート」

「だから聞けつて・・・まあいいか」

そう言つてメイはマントをはためかせる。するとマントにあたつた

「一体のグリフォンがズタズタに切り裂かれる。どうやらマントに何らかの秘密があるらしい、そこヘルウがメイの肩を叩く。

「いっちは終わつたよ」

ルウの背後には五体のグリフォンが細切れになつていた。

「また負けたあ・・・。」

そう言つてまた無駄に勝負を挑んだりするのだった。

もはや勝負は歴然だつた。多少傷付いた者はいるものの死んでいるもののいないこちらに対し、ほぼ全滅に近いグリフォン・・・勝負は決まつたと思われた・・・だがそこに一体巨大な青いモノが舞い降りた。

それを目にした兵士達は喉が壊れんばかりに叫んだ。

「ブルードラゴンだつ！・！」

と・・・。

ブルードラゴンは所々傷を負つていた、だがどれも致命傷とは程遠いものばかりだつた。

そしてブルードラゴンは大きく息を溜めた。

「やばい・・・。」

逃げようとした兵士達だがその瞬間ブルードラゴンの口に溜められていたものが吐かれた。

雷のブレス・・・それは人間など脆い生物は一瞬でこの世から排除してしまうほどの威力を持つていた。

大地を削り、大気を痺れさせ、生きるものを消失させるそのブレスが吐かれた時、何十人の兵士達の命がこの世から消えた。

目の前で起こつた殺戮に釘付けになる三人だがルウとメイが三人を我に帰らせる。

「逃げるぞつ！・！」

最初は理解が出来なかつた。だんだん頭が戻つてくるに連れて三人

は動搖する。

「逃げるつて何処に！？あのブレス見たでしょ！！あれじゃ・・・何処にも逃げられやしないわっ！！」

そう吐き捨てたシルフィイをルウが叩いた。

「自分をしつかり持てそんなことを言つな」

そしてルウがシルフィイを抱える様に持ち五人は逃げようとした。だがその時一瞬ルウは気付いた。こちらにブレスを撃とうとしている事に「動け」と足に命令しているのに全く動かない・・・だがそれはルウだけではなかつた。他の三人も動けなくなつていたのだ。初めて感じる濃厚な死の恐怖、そして雷のブレスが五人に向かつて吐き出された。

思わず目を瞑る五人、次の瞬間に襲い掛かる死の痛みを忘れたいと言つよしに目を瞑つた。

数秒たつた。その時ルウはおかしい感じた、何故なら痛みが来ないからだ。もしかしたら痛みも感じないほど一瞬にして死んでしまつたのではないか？そう思つて目を明けると黒い壁が立ちふさがつていた。

『何だこれは？』理解できない現実が頭の中で暴れ回る『冷静になれ』と言い聞かせてなお頭は冷静にならない。

コシン背後から足音が聞こえた。コシンまた聞こえた。

振り返りたがつたが同時に振り返りたくなかつた。

何故なら背後に這いずり回る悪寒があつたからだ。

胸が痛い・・・心臓が驚撃みにされていくように痛い。

だがなお足音は続く・・・。

新しい感情が生まれる・・・死にたい・・・ここにいる位ならブレスを浴びて死にたい・・・。

そして足音が真横を通り過ぎる。

姿を見ようと横目で見た時だつた。

深淵のように深く暗い瞳・・・見てているだけで生命力が根こそぎ奪われていく。

そいつは壁に軽く触れるすると壁は幻の様に溶けて消えた。

そしてルウはようやく理解した。

こいつが例の闇の魔法使いで・・・絶対に逆らってはいけない絶対的な力を有した存在だと言つことを

輪郭はぼやけてはっきりと分からぬがルウは確信を持つてこいつが男であり同年代ぐらいの青年だということを感じた。

そいつが声を発した。

思つたとおり若い声男の声だつた。言葉は詠唱のようだつた。だが詠唱と呼ぶには些か短い気がした。

「影よ・・・舞え」

確かこの詠唱・・・映像の・・・。

そこで考えは中断された、もしこの詠唱が映像のものならドラゴンはおろかここにいる全ての人間が死に至るからだ。

だが予想は大きく裏切られた。

一箇所に収束した影の針はワインの栓などを明けるような円を描く針となり、回転するようにブルードラゴンに襲い掛かつた。

だがブルードラゴンも馬鹿ではなかつたそれを空へ飛び上がり回避したのだ。ところが針はブルードラゴンを追つように空中に伸び翼を貫いたのだった。

そして浮力を失つたブルードラゴンは墜落した。そこに影の針がバラバラに戻りブルードラゴンを貫いた。と思われたがブルードラゴンの鱗に阻まれ傷つけることが出来なかつた。

それを見たブルードラゴンは這つようになにかに彼に襲い掛かつた。だが彼は影の針を消した。

「死神の裁き」

と詠唱すると同時に続けて

「断罪の鎌」

と唱えた

すると影から三体の死神が現れた。そして後を追うように死神たちが持つ鎌よりもかなり大きく禍々しさを持つ鎌が現れた。

彼はそれはもつとニヤリと笑った。

それを見たルウは寒気が走った。

そして地面を蹴り死神と一緒にブルードラゴンへ向かって行つた。

死神が鎌で牽制する中彼は大きく振りかぶつた。

グチャアと言う赤い血飛沫と肉が斬れる音と共に左肩から右側の腰にかけて彼は鎌を振り切つた。

ほぼ真っ二つに斬れたブルードラゴンはすでに事切れていた。

死神が更に解体しようと鎌を振りかぶるが彼はそれを止めた

そして死神を帰らせるとブルードラゴンの下に黒い穴が現れた。

沈むようにブルードラゴンは穴に飲み込まれ・・・消えた。

そいつはついでにグリフォンの死骸の片付けもしたようで戦闘のあつた場所には何も残つていなかつた。

そしてそいつは影に沈んで消えていった。

「終わったのか・・・？」

信じられないと言つた様子で声に出すルウだがそれはルウだけではなかつた。

メイ、シルフィ、ナイア、ラウなど生き残つた者全てが驚きを隠せないでいた。

不意にメイがルウ袖を引っ張り

「とりあえず帰ろうか」

と言つたので五人はインビジブルガーデンへ帰つていつた。

## 第五幕

とりあえず五人はアルマの所に戻っていた、先ほど少し無理に動いたので傷が開いてしまっているアルマだったが意外と元気そうだった。

そこにルークが入つて來た。

「他の皆は、ここを出る準備が出来たぜ。看病は俺がしてゐるから荷物の整理でもしてきただろうだ？」

ルウとメイは護衛の準備は整つてゐるらしく大丈夫と言つてゐた。だが他の三人は準備が出来ていなかつたらしく荷物を準備しに皆のところへいつて行つた。

しばらく沈黙が続き・・・ルークは氣付いたように喋りだした。

「そいついえば自己紹介がまだだつたつけ？俺はルーク、さつきいたシルフィイつて女の子に引きずられるようにここまで荷物持ちやら雑用を任せられた可哀相な青少年です。一応あいつ等と同じ魔法学校の生徒です」

啞然とした三人だったが不意にアルマが笑い出した。

「くつくつく・・・なかなか愉快な者だな。我是アルマ、姫より聞いてゐると思うが一応『朱雀』という、二つ名を持っている。もつとも今はただのお荷物の怪我人だがな」

なにやら紹介をしなければいけないような雰囲気になつたのでルウとメイも自己紹介をはじめた。

「僕はルウ、レジスタンスのメンバーですがアルマさんを無事にレーデンまで送るようエルリス様から護衛を任されたものです。」

「私はメイ、ルウと同じでアルマさんの護衛を任された一人です。」

一通り挨拶が終わりルークがおもむろに懐から紙を出した。そこには女の子の絵が書かれていた。

「質問なんですが、この娘を見たことありませんか？名前はリーンつていう娘なんです。あっ！！もしかしたらこの絵よりももう少し

成長しているかもしれないですが・・・。」

三人は覗き込むように絵を見た・・・だが首を振った。

「そうですか・・・変なこと聞いてすみませんね」

少し苦笑ぎみに笑つたルークにアルマは話し掛けた。

「その娘・・・リーンとか言つたかな、そのこと君はどういう関係なんだい?」

するとルークは遠くを見詰めるような目をしてゆっくりと語つた。

「俺が初めて・・・初めて守りたい、ずっと一緒にいたい、そう思つた娘です。」

「わかった・・・レーデンへ着いたら部下に命じて探せよう、だが聞かせてくれもし見つかからなかつた場合は君はどうする?」

その言葉にルークは即答する。

「何年掛かっても探し出します。その娘を探し出す為なら俺はどんな事だつてやつてみせる、汚い仕事だつていぐりだつてやつてやる、命差し出せと言われたら差し出してみせる。」

ルークの目に宿つた本気の瞳、翠の瞳が一瞬黒くなつたように思えた。

「その決意・・・しかと受け取つた。その心を忘れるな・・・ところでふと思つたのだが、君は何故紙に書いて見せるんだ?魔法で映し出せばより鮮明に分かるはずだが・・・。」

その質問に困つたように答えた。

「実は俺、魔法が使えないんです。」

ルークの言葉に三人は固まつた。無理もないだろう、魔法学校という所は文字通り魔法を教えるところで、詠唱などは始めに系統ごとに教える教員が替わりはするが、映像を映し出したり、動かない物体を宙に浮かせたりするなどの系統にも属さずどの系統でも使える基本魔法と呼ばれる魔法は関係なしに教えられるものなのだ、それが使えないと言うことは魔力がない・・・つまり魔法が使えないと言うことであつてルークの言つたことは単純明解なわけだ。だが魔法が使えないと言つことは、魔法学校の生徒としては、あつてはなら

ないことであり三人は単純に驚いて固まつたわけだ。

硬直することおよそ三十秒いち早く精神の世界から帰つてきたアルマはルークに疑問をぶつけた。

「ではどうやって魔法学校に入つた！？」

「う～ん・・・何ででしようか？」

あいまいな言葉を話すルークにアルマは少し苛立ちを覚えつつもう一度聞こうとしたときだった。

ガチャつという音とともにエルリスが入ってきたのだ。

「アルマ傷の具合・・・ん？どうしたんですか？」

苦笑した青年が一人と青年に少し苛立ちながら喋ろうとするアルマ、その後ろで固まっているルウとメイおおよそ何があつたのか見当もつかないエルリスが呆然としていると

「あっ！！エルリスさんが来たみたいですよお邪魔になるといけないんで帰りますね」

そういう残してルークは素早く部屋から出て行つた。  
「待てっ！！」

とアルマが言った時には足音がかなり遠のいていた。

「すみませんアルマ・・・状況が読めないのですが

「気にするな、それよりエルリス何故ここに来た？」

「ああ伝えたいことがありました・・・また闇の魔法使いが出でました」

「何処に出たっ！？被害は！？」

「出た場所は先ほどの戦闘が行われた場所で・・・被害はこちら側にはありません。」

「こちら側？」

「今回奴の犠牲となつた者はブルードラゴン一体で、それも驚いたことに奴はルウ達五人を庇うようにしてブルードラゴンの雷のブレスを防いだそうです。その後奴は傷一つ負うことなくブルードラゴンをたつた一人で倒したらしいです。」

「ブルードラゴンをたつた一人で・・・傷一つ負わずに・・・と言

う」とは奴の実力は少なくとも我やお前と同等はあると言つ事が・。  
。」

「そうみたいですね・・・今部下達に奴の正体について調べさせて  
いるところですが、あまり期待はしないほうがいいでしょ」「

二人は溜息を吐く

「今のところ奴の行動は不可解すぎるな」

「ああ・・・私の部下とあなたの部下それらを殲滅したと思つたら、  
今度は私たちを助ける・・・」

「敵か味方か・・・あるいはそのどちらでもないか・・・。」

「ですが結論を出すにはまだ早いですね」

「そうだな・・・ところでそこに固まっているお前の部下・・・こ  
ちらへ呼び戻さなくていいのか?」

「あっ、忘れてました」

そういうつてエルリスは一人に近寄ると声をかける。

「二人とも起きなさい・・・というよりも帰ってきなさい」

何度も呼びかけているうちに一人が動き出した。そして動き出すな  
リルウが声をあげた。

「エルリス様っ！・・・ル、ルークは何処に・・・。」

「その前に状況を説明して欲しいんですけどね」

代わる様にメイが話し始めた。

「ルークが魔法使えないくて、でも魔法学校の生徒で・・・。」

「良く分かりませんが・・・まだ詠唱を覚えてないのでは?」

「違うんですっ!! 基本魔法が使えないんです」

”そんな馬鹿な”という目でアルマを見るがアルマは頷くばかりだ  
った。

「それは・・・ありえませんね、どんな魔法学校への入学にしても  
魔力があることが絶対条件ですし・・・。」

「僕とメイがルークについて皆から聞いてみます。」

「・・・頼みました。ですが決して無理はするんじゃないあります  
んよ、あなたはもちろんそのルークという青年に対してもね、では

そろそろ荷物を持つて第一ゲートへ行きなさい、あなた達以外にはもう伝えましたから

「わかりました」

と息を合わせて返事をして一人は部屋を出て行つた。

「さてアルマ、あなたもその青年には注意を払つていってくださいね」

「言われるまでもないわ」

そう言って傷だらけの体を起こしてよたよたとアルマは歩いていった。

「ホントに・・・何も怒らなければ良いんですけどね」

## 第六幕

アルマが第一ゲートに着いたときには全生徒の用意が整っていた。アルマはラウとシルフィに支えられながら馬車に乗せられた。

「アルマさんはここで休んでいてください」

そう言うとシルフィとラウは荷物の積み込み作業をしようと廊に行こうとした。

「二人ともちょっと待つてくれ」

アルマに呼び止められ一人は振り返る

「どうしたんですか？」

「戦いたいなんて駄目だぜ？」

「いや違う、少しばかり君達に聞きたいことがあってな・・・ルークという青年を知っているな？」

「ルーク？ ああ、あの寝ぼすけのことですか・・・何か失礼なことでもしました？」

「でもルークはいつも寝ているが比較的無害だからそれは無いんじやないか？」

「知っていると言つことでいいんだな・・・実はルークが魔法を使えないということが本当かどうか知りたいのだ」

「・・・」

シルフィは無言で押し黙った。

「そういうえばそんなこと聞いたことがあるな・・・この前の模擬戦も何にも使ってこなかつたし、でも今一番ルークの身近な存在はシルフィだしシルフィは何か知らないか？」

「・・・」

「おい・・・どうした？」

「・・・」

「なにやら迷つていることがありそうだな

「・・・」

「良かつたら話してくれないか？」

するとシルフィイは言葉を紡ぎ始めた

「これから言つことは、ここだけの秘密と言つ約束をして貰ださる

なら

二人は頷いた。

「もしかしたら見間違えかもしないんですが・・・これは、四年前で私とルークが顔見知りではなかつた時の話です。当時の私は親の使いで隣村まで行くところでした、その時町外れにあるルークの家の前でルークとルークのおじいさんが話しているのを見ていました。ルークは何かの絵を握り締めてリーンとか言いながら泣いていたんです。その時本当にこれは見間違えかもしないんですがルークの翠の瞳が黒くなっていたんですね・・・」

「おい・・・それって・・・。」

「ルークの正体が闇の魔法使いということか？」

「核心はありません・・・でも・・・。」

「それと・・・リーンと言つていたのだな？」

「確かに言つていました」

「わかつた・・・協力に感謝する、出来ればそちらから探りを入れてもらうとありがたい」

二人は頷いて答えた。

三人が話を終えると荷物の積み込みが終わつており今まさに出発しようとしていた。

「では行きましょう

というナイヤの合図で一行は自分達の村への帰路を進んでいった。途中ゴブリンと呼ばれる醜い人型のモンスターに襲われたが、まったく問題なく進んでいった。

一日、二日、四日と嵐の前の静けさを思わせるような静寂な日々が続いた。

五日目少し遅くなつてしまつたが村がそろそろ見えるだらうというところまで来た。

遠くの方で村の方から黒い煙が立ち昇っていたので一行は自分達のために祭りでもやつてくれていると思っていた・・・近くに行くまでは、それは村が黙視できるところまで来た時の事だ・・・村の光景に一行は唖然とする、家が潰され、魔法学校は所々に穴が空いておりいつ崩れてもおかしくはない状態で、一番田に留まつた光景は真ん中に積み上げられた人の死骸の“塔”だった。

そして生徒達一行が生まれ育つた村は・・・壊滅した。

村の魔法学校跡地へ集まつた一行・・・生徒達の中には両親を失つたショックで泣きじゃくるものは少なくはなかつた。

シルフィイは涙こそ浮かべはするものの流すまいと頑張つていた、ラウは黙々と死骸の“塔”的死体を供養して埋めていた。

ナイアとアルマはラウの手伝いをしていた。

全ての死体を埋めるのに殆ど一昼夜使ってしまい暗くなつていていた空は明るくなり始めていた。

一晩経ち少し落ち着きを取り戻してきた生徒達を次なる不安が襲つてきた。

それは、帰る場所がないと言つことだった・・・だがもつと恐ろしいこともあつた、それはこの村を壊滅させた奴がいつまた責めてくるか解らないという事だつた。

落ち着かせようと努力するナイアだが、恐怖に飲まれる者には一切意味がなかつた。

そこへシルフィイとラウがルウとメイを連れてナイアとアルマのところにやつてきた。

「これからどうします?」

「とりあえずレー・テンへ皆さんをお連れしようかと思つています」

「なんだ・・・そういうえばアルマさん・・・ルークの家を見て見ます?一応村はずれだったので無事だと思つんですが

「見ても大丈夫なのか?」

「ルークは家に居ることなんて滅多にありません」

「では行くか」

「な、何をするつもりなんですかっ！？」

行こうとする五人をナイアが止める

「姫には言つていませんでしたな」

そしてアルマはこれまでの経緯をナイアに話した。

「言つておきますがこれは我等六人のみしか知つていません・・・

内密にしていてください」

「そうですね・・・私も彼についてはいろいろと知りたいことがありますので」

こうして六人はルークの家へ向かつた。

ルークの家の中は埃っぽく掃除なんて全くされていないようだった。

「では手分けしてルークに関するものを探そう

ルークの家は二階建てだったので一階をアルマ、ラウ、ルウの男三人が二階をシルフィ、ナイア、メイの女三人が探すことになった。男三人組は現在台所を捜索中だった、台所には蜘蛛の巣のかかった食器が置いてあり人が住んでいるとは思えなかつた。

「ホントに此処でルークが生活してたのか？」

「話によると二年前におじいさんが死んだらしいからそれから使われていないんじゃないかな？」

「とにかく今は手を動かせ」

そして三人は捜索を続けた。

そのころ女三人組は寝室を調べていた、寝室だけは時々使われているのか底まで汚くはなかつた。

シルフィイはそこで一枚の基本魔法の投影呪文を永久化させてある紙を見つけた、随分古いものらしくボロボロで色褪せていたがそこには幼いルークと思われる少年とルークと手を繋ぐ銀色の髪と金色の瞳を持つた少女がいた。

だがそのルークの瞳は翠ではなく黒だった、だがその黒は幼い純粹さで輝いていた。

シルフィイはその紙をばれない様に懐へしまった。

何やつてんだろう・・・あたし・・・。

と毒づいていた。

その時一階で驚きの声があがつた。

三人は急いで下に下りると台所の床に隠し通路のよつた階段が下へ続いていた。

「凄いつ！！こんな仕掛けよく解つたわね」

シルフィイは驚嘆するとルウが苦笑氣味に答えた。

「いやあ・・・床が腐つて抜けただけで・・・」

しばらく啞然としていた女三人だつたが

「と、とりあえず下へ行きましょう」

とナイアが言つたので六人は下に向かつて行つた。

六人は少し広めの石造りの部屋に着いた、部屋はアルマの炎により明かりがともされてその姿が暗闇よりあらわになつていつた。

床に書かれた魔方陣、本棚に所狭しと置かれた分厚い本、そして魔方陣の中央に置かれた漆黒の鎧とその首にかけられたブラックダイヤモンドと呼ばれる黒い結晶のついた逆十字のネックレス

「何なんだこの部屋は」

ラウが思わず声を出して聞いてしまう

その時アルマが逆十字のネックレスを見て何かを思い出した。

「ま、まさか・・・だがそんなはずは・・・いやしかしこれなら辻棟が合う・・・確かあの時の少女の名前も・・・」

「どうかしたの？」

ナイアの問いにアルマが初めての表情を見せた。

「なん、でもないで・・・す」

途切れ途切れに言つた言葉でますます怪しいといつた目で見るナイア

「知つているなら教えなさい・・・これは姫としての命令です」

「くつ！・・・ですが姫様・・・」

「早く言いなさい・・・！」

いつものナイアではなく姫としてのナイアがそこには在りアルマの口調も丁寧なものになつた。

「わかりました・・・姫は三つの瞳という伝承を知っていますか？」

「それは、小さい頃に書庫で見つけて読んだ事があります……確かに何百年も前に存在した絶大な力を秘めた三つの瞳についてのことです……。」

「そうです……では何故その伝承について聞いたのか……三つの瞳の一つに闇の瞳と呼ばれるものがあるのは知っていますね？実は昔あったことがあるんですよ……その闇の瞳を持つ少年に……姫はこの地に昔あった国を知っていますか？」

「知らない……。」

「そうですよね……これはレーーデンがまだ戦闘国家などと呼ばれてない頃の話です……。この地には悠久都市『ハーゼンデル』と呼ばれる都市が存在していました。今の今まで忘れていましたがハーゼンデルの城に私も招かれたことがあったのです。そこで二人の子供に会いました……一人は漆黒の瞳をした少年名前はティアス……チエスの好きな少年でハーゼンデルにいたときは良く相手をさせられました。そしてもう一人リーンというその国の姫たる少女でした。その時の我等の国宰相は傲慢な者で皇帝が病で床についておられる時にハーゼンデルに攻め込みました。当時ハーゼンデルは怪しげな研究をしているといふこともあり宣戦布告の理由には事欠きませんでした。そして宣戦布告から三日後……ハーゼンデルは何の抵抗も見せずに降伏しました。そしてハーゼンデルのリーンという姫以外の全ての国のは殺されました。」

「し、しかしそのような虐殺があつたならば私の耳にも届いているはず……。」

「宰相が全てをもみ消したんですよ……そのために全てのハーゼンデルの民まで殺して、」

「酷い……でもそれとさつきの話の闇の瞳との部屋との関係はいつたい……。」

「その時のハーゼンデルの紋章はそこネックレスと同じ逆十字だつたんです、さつきも言いましたがティアスという少年の瞳の色は伝承にある闇の瞳の色の漆黒、そしてルークの家の隠し部屋にある

逆十字のネットクレス、そしてルークの名前

「名前？」

「チエスのルークとはキャスリングと呼ばれる特殊な動きを使うことが出来ます。キャスリングとは王<sup>キング</sup>を守るような形で使うことがあります。彼にとつて自分への皮肉なのでしょうね・・・王を守ることが出来なかつた自分への戒めの為の名前のような感じがしますから・・・チエス好きの彼が考えそうなことです」

「でもまだ無理矢理ではないでしょうか？」

その時シルフィイが下を向いたまま一枚の紙を差し出した。

「ごめんなさい・・・多分これが決定的になるとと思う・・・」

「これは・・・私が知つている頃の一人だ・・・何故こんなものを

「寝室で見つけて・・・」

「そうか・・・だがこれでハッキリした、闇の魔法使いの正体はルークだ」

それを聞いた瞬間ナイアの目から涙が一粒流れた

「残念ですが感傷に浸つてゐる暇はありません姫様・・・もし本当にルークが闇の魔法使いならレーデンを狙うことは間違いありません」

「そうですね・・・事態を急いで收拾しなければいけませんね」

「とりあえず此処を出ましょう・・・」

家の外に出るとルークが帰つてきているのか見えた。

「今が聞くチャンスかもね・・・」

そして六人はルークを囲むように立つた。

「な、なんだ皆・・・目が怖いぜ・・・」

少し引き気味にルークが呟いた

「ルークに聞きたいことがあるんだが」

アルマがそう言うと即答するかのように

「聞きたいこと？学校のことはノーコメントだからな」「違う・・・ティアス・・・まだ白を切るつもりか」

ティアスという名を聞いた瞬間ルークの顔色が変わった。

「な、何言つてるんだ・・・ティアスって誰だよ？」

「ルークか・・・チエス好きなお前らしいって言えばお前らしいのかもな」

「チエスなんか嫌いだ」

「その名前に縛られている限り前には進めないぞティアス」  
そして先ほどの紙を見せ付けた、だがその瞬間ルークの目が黒くなり、回りを殺気が埋め尽くし始めた。

「何を言わてもいいが人の心の奥底に入ろうとするとはよほどその命要らない物と見えるな・・・お前らなど此処で殺してやつてもいいのだぞ」

いつものルークからは考えられないほど冷酷な言葉が六人に突き刺さる。

そして一瞬の後殺気が消えて

「だからこれ以上深入りしないでくれよな・・・友達失いたくないからさ」

そう言ってルークは部屋の中に入ろうとした、その時家を中心に戦方陣が展開される。

「なつ！？これは・・・巻き込んだじまつたか」と唇を噛むルーク

空がゆがみ始めて空間にぽつかりと穴が空く・・・そしてそこから五人の漆黒の黒衣を着た者が現れる。

最後に紅い鎧に身を包んだ騎士が一人現れ口を開く

「さあ・・・狩りの時間だ」

## 第七幕

六人はバラバラに散開しルークはその場から真っ直ぐに紅い鎧の騎士の下へ走つていった。

漆黒の黒衣を着た者はアルマに襲い掛けた。

「我を狙うとは・・・愚か者どもがつ・・・」

アルマの怒号と共に火炎の渦が黒衣を焦がすが全く動じた様子を見せずに突っ込んできた。

アルマは槍を手に持ち一人へ投擲した、標的となつた者は紙一重で攻撃を避ける。

槍の切つ先が黒衣を裂きその者の顔が見えた、その顔は男の顔で生氣の抜けたような青白い顔をしていて目の色は灰色だつた。そして顔の見えた男は低い声で詠唱を始めた。

「我に付き従いし影よ・・・我が命により此処に集い舞え」

詠唱が終わると男の影から一本の黒い針の影がアルマに伸びた。

「この技はあいつと同じ・・・さつきの詠唱は同じ物だつたのか・・・だが長かつた分こちらの方が威力が高いはず・・・」

そして記憶を呼び返し影の壁を破れなかつたことを思い出しどさに身を引いて避けた、だが影の切つ先がアルマの方向へ伸び再度アルマを貫こうとした。

「氷よ刃となつて敵を切り裂けッ！」

ラウの詠唱によつて出来た氷の刃がアルマを襲つていた影の針を切り裂きアルマを助けた。

「アルマさん何してるんですかっ！傷が痛んで詠唱できなんですか？」

「いや・・・まさか影を破壊することが出来るとは・・・あいつだけが別格なのか？」

考えている間に先ほどの男が他の黒衣の者たちと合流し揃つて詠唱し始めた。

「 「 「 「 「 影の底より産まれし死を司りし神である死神よ・・・我が前に立ちふさがりし愚かな者に等しく裁きを与えたまえ」」」

すると一人一人の影から死神一体ずつが這い出てきた、現れた五体の死神は鎌を振り上げ一人に襲い掛かってきた。

その頃違う方向へ逃げた四人はルークの後を追い紅い騎士の所に来ていた。

「ほお・・・まさかとは思つたが彼の『魔王』がこのような辺境の地に住んでいたとはな・・・しかし魔王よ此処へ何のようだ?」

「その口ぶりだと俺目当てではなさそうだな・・・何が狙いだ?『炎帝』のスレイスよ」

「私のような弱い者の名前を覚えていただき光榮至極ですね・・・今回的目的はアルマの所持している火の神具の回収です。」

「組織の命令でも従わないぞ?」

「結構です、邪魔さえしていただかなければ」

そういつて不意にスレイスはルークの背後に手をかざす、「邪魔者には退場して頂かないとね」

その言葉を発した瞬間暗闇に一筋の赤い光が突きに抜けると同時に横に何かが移動する。

「外しましたか」

そして暗闇からナイア、シルフィイ、ルウ、メイが出てきた。

「先ほどの話が本当だとしたら・・・見過ごすわけには行きません」

「ルーク・・・貴方はいったい・・・。」

「僕の任務は彼等を無事にレー・デンまで送り届けることだ、障害となるなら倒すよ」

「魔王とか炎帝とか良くわかんないけど、負けるわけにはいかないね」

やれやれと首を横に振るルーク

「分かつたよ・・・降参だ降参」

「それは裏切りと見ていいのですか?」

「もしお前が彼等を攻撃するというなら・・・敵になるかもしれないね」

いな

「面白いっ！！」

一瞬にしてスレイスはルークの眼前に現れ腹を蹴り上げる、しかしその蹴りはただの蹴りではなく炎を纏つた鋼鉄の脚甲のはかれた足の蹴りだった。

ルークは一度目を瞑り・・・刹那で目を開けた、その瞳は黒ではなくより深みのある漆黒と変わっていた。そして滑る様にして影の中に落ちた。

「避けられましたか・・・影という虚空間に逃げ込むなんて・・・本当に闇系統の魔法使いは厄介ですね」

「影よ舞え」

早口で唱えるとスレイスを囮のように影の針が現れる。

「炎よ壁となれ」

スレイスは影の針が襲い掛かってくるのと同時に炎の壁を作り出した。

影の針が燃え尽きながらも炎の壁を削つっていく

「くつ！！これが魔王の力ですか・・・こんなに早く壁が壊されるとは・・・」

そしてついに炎の壁を突き破りスレイスを影の針が襲つた。

「甘いですね・・・神具には劣りますが私も武器ぐらい持つているんですよ」

そういうと片手に魔力を集め出した

「業火よその姿を剣となせ」

詠唱が終わつたその手には紅く輝く刀身を持った炎の剣が掴まれいた。

スレイスは炎の剣を一閃し影の針を振り払う、次々と襲い掛かってくる針たちを物ともせずに焼き払つてゐる姿をナイア達は見ていた。

「入る隙がない・・・化け物かよあいつ等」

「そんなことを言つたらルークに悪いよ・・・私たちのために戦つてくれてるんだから」

そう話している間にスレイスが全ての影の針を焼き払い終わった、  
がその顔は空を見つめていた。

### 「断罪の鎌」

不意にいつの間にか空に現れたルークが詠唱すると手に禍々しいほど巨大で黒光りする鎌が現れた。

ルークはその鎌を振り下ろすスレイスも抵抗をしようとしたが圧倒的な力の前では役に立たず炎の剣が粉々になった。そして鎌の刃はスレイスの体を襲った、あまりの勢いにスレイスは吹き飛んだが真っ二つになつていなかつた。だがスレイスの鎧には痛々しい傷跡が残されていた。

### 「意外に固かつたなその鎧」

と言いながらルークはスレイスに近寄つていく、スレイスは無理に体を起こし立つがにげようとしない

### 「逃げないのか？」

「逃げるのは騎士の恥でね」

「そうか・・・恥じか・・・面白い、では殺さんその恥じを背負つて生きていくがいい」

そういうとルークは何もしないで身を翻し自分の家の方向へ行つた。

「ふつふつふ・・・この借りはいつか返すぞ」

そしてスレイスは氣を失つた。

それを見ていた四人は・・・ルークに話し掛ける言葉を思いつかず呆然と見送つっていた。

死神たちの動きが止まる・・・そして黒衣の者たちも糸の切れた操り人形のようにその場に倒れた。

「どうなつてんだ？」

「知らないが・・・どうやら親玉が倒されたようだな

「じゃあどうします?」

「こいつらを拘束してから皆と合流をしよう」

「拘束つて魔法使いにしても意味がないはずじゃ・・・。」

「意味はないと思うが・・・安心は出来る」

そしてテキパキと五人の黒衣の者達を拘束し一人はスレイスのいた方向へ向かっていった。

## 第八幕

古ぼけた小屋の一室のベットの上でスレイスは目を覚ました、ここは何処だらう?と思つて動こうとすると体が動かない……無理に動こうとすると先ほどの戦いで受けた傷が悪化してしまいそうになる。ふとスレイスは自分の体を見渡してみた、体にはいかにも頑丈そうな拘束具が何個も着けられていた。

「どうやら……捕まつたみたいですね」

何か使える者はないかと回りを見渡していると部屋の扉が開いた。

「目を覚ましたみたいですね」

そこには先ほど自分が殺そうとしていた女がいた。

「貴方にはいろいろと聞きたい事があるのですが……とりあえず包帯を変えましょう」

そつ言つて女はスレイスの傷を丁寧に消毒し包帯を巻き始めた。

「貴女の名前は?」

「私ですか?……ナイアって言います」

スレイスは少し驚いた顔を顔を見せた

「ナイア!?ということはレー・テンの姫だったのですか?」

「形式上ではそうなっていますね……ですが殆ど親から見離されたようなものです」

「見離された?」

「私は第二王女なのですが……非公式ですが私の一つ下に弟がいるのです。父上は王位を弟に継がせる気の様で……弟は文武に優れています魔法にも長けています」

「初耳です」

「ですから非公式なんですよ」

とナイアは少し笑つてみせる、スレイスはその顔に少しだけキッとした。

「何だか長話になつてしましましたね、退屈させてすみませんね」

「いや、面白い話でした……お礼に一つだけいい事を教えてあげましょ、魔王には……あなた方がルークと呼んでいる青年にはあまり関わらない方が良いですよ?」

「それは忠告ですか?」

「いえ、ただの怪我人の戯言です……そして、私はこれからどうなるんです?」

「傷が回復して魔法が使えるようになる前にレーテンに連れて行かれると思います」

「そこで……尋問といつわけですか」

「すみません」

「何謝つているんです? もともと私は貴女を殺そうとしたんですよ?」

「それでも……すみません」

「フツフツフ、貴女は本当に面白い、私の部下がこの村を襲った時とは全く違いますね」

「どういうことです?」

「焰と言う火の魔法使いと戦つたでしょ? 彼は組織の命令を無視してこの村を襲つたのです

・・・その時の貴女は問答無用で彼に魔法をぶつけたじゃないですか?」

「焰は罪のない人々を殺しそぎていました……ただの殺人者にかける情けはありません」

「言つておきますが、私は彼の三倍は人やモンスターを殺していくですよ?」

「しかし焰の目はただの快楽殺人者の目であなたの目は確かな意思を持った者の目です」

「流石は姫……人を見る目は確かですね」

「誉めても開放はさせてあげられませんからね」とナイアは意地悪そうな笑みを見せていった

「素直に誉めているんですよ……しかし本当に悲しいことですね」

「何がですか？」

「貴女の祖国が三日後に私の組織の大部隊に攻められるということです」

その言葉にナイアは唖然とした。

「そ、それは本当のことですか！？」

「本当のことですよ・・・ですがここからレーーデンまではどう頑張つても五日はかかる道のりですからね」

「そんな・・・父上・・・」

ナイアはその場に泣き出してしまった。

「泣かないでください・・・女性に泣かれるのは初めてなんです・・・対応に困るじゃないですか」

それでもナイアは泣き続けた。その様子にスレイスは溜息をついた。  
「方法がないこともないんですよ？」

その言葉にナイアは泣き止んだ。

「本当に素直な方ですね」

とスレイスは苦笑した。

「あの・・・その方法つていつたい・・・」

「魔王の影を使うんです・・・魔王の影は一種の異世界のようなものになつていてこの世界の何処へでも出口を作ることが出来るのです・・・ですがそれでも時間は遠ければ遠いほど繋げるのに掛かります。しかも作っている間は魔王は自らの魔力を放出し続ける限りませんから・・・耐えがたい苦痛に違いありません。」

「そんなこと頼めません・・・」

「あなたがどう思おうと勝手ですが・・・そのために犠牲が出ることも考えておいてください」

「でもどうしてこんなことを教えてくれたんです？」

「怪我人の单なる気まぐれですよ」

そしてナイアは「ありがとう」と言い残して部屋から出て行つた。

「ありがとう・・・ですか」

スレイスはそう呟いてまた眠つた。

ナイアはスレイスから聞いたことを皆に話し探すのを手伝つて貰つていた。

シルフィイとラウは生き残つた生徒にルークがナイアの大切な物を持つて何処かへ行つてしまつたと嘘の情報を流し探すように促した。だが一時間経つてもルークの居場所は見つからなかつた。シルフィイの風の索敵範囲は半径三キロほどだつた。それは村をすっぽり軽く覆えるような大きさだつたが見つけることが出来なかつた。だがルークが誰にも何も言わずに村を出ることは考えられず途方にくれていた。

そして一度六人は集まつた。

「風の索敵に引っ掛からない・・・でも町の外に行つたことは考えられにくいから・・・多分風が無い所にいると思う」

「風が無い所なんであるか?」

「それもそうだよな・・・風が無いって事は空気が無いって事だし・・・人が生きていけるわけ無いしな」

「もしかして結界魔法でも張つているのではないですか?」

「それはないと思います姫・・・見たところによると闇の魔法は攻撃に特化しているようですし」

「でも未知なる魔法ですしあるかもしません」

六人が議論を続いていると

「闇の魔法に結界魔法はあるみたいですがその手の結界魔法ではないですよ?」

と背後から声がしたので振り返つた、そこにはスレイスの姿があつた。

「お前・・・どうやって拘束具を・・・」

「私には一つだけ自慢できることがありましてね・・・傷の直りが

常人よりも格段に早いんですよ」

「何のつもりでここに来た・・・」

「困っているようなので助言をと思いましてね」

とナイアにスレイスはワインクする。

「風の索敵は本当に素晴らしい能力ですが欠点が二つあります。一つ目は風の無いところは索敵できない、二つ目は一度に風の集めてきた情報を処理できない、三つ目は膨大な魔力を有する者がいる場合魔力によつて索敵にモヤがかかり正確に索敵が行えない・・・ようするに魔王の魔力が凄すぎて見つけられないというわけです」

「そんなこと今まで一度も・・・」

「それは魔王が魔力の源の目を封じていたからでしょう」

「それじゃあもう私じゃルークを探せないの?」

「そんなことありませんよ・・・きっと今貴女がしている索敵は魔王という人物を指定した索敵ですね?では今度は魔力の発生地点を指定して調べてみればいいのです・・・私とそこにいる朱雀以外の場所で魔力が多く発生している場所が魔王のいる場所です」

「何でこんなことを教えてくれるのですか?」

「怪我人の・・・いえもう怪我人ではありませんね、暇人の戯言です・・・そういえば私もレーデンに用があるので連れて行ってください」

連れて行けるかっ!...とアルマが反論しようとした時にナイアがそれを静止した。

「分かりました・・・その代わり手伝つてくださいね」

そしてシルフィイの風の索敵が終了すると

「本当だ・・・ここ以外に一箇所だけ魔力の凄いところがある・・・」

。

「何処だそこ?」

「ここから少し遠いところ・・・ルークがこんなところに行つているなんて初めて・・・」

「ではとりあえず行つてみましょう」

そしてスレイスを含めた七人はルークの下に向かつて行つた。



## 第九幕

村の端にある青々と生い茂つた森のほぼ中心部分存在する泉の前にルークは座っていた。

手に持つ草がルークに吹かれることによつて独特のハーモニーを森に響かせている、その音色に同調するように泉は波紋を作り出し、波紋は重なり合つて泉の表面を走り回る。

不意にルークの演奏が止まる

「炎帝か・・・厄介事は嫌いなんだがな・・・。」

まあ、わざわざ厄介」とに巻き込まれるように助けてしまつた俺は馬鹿なんだろうがな

そんなことを思つてはいるルークの田の色が変わった。

「出て来い・・・何のつもりだヘル」

誰もいない森、だがそこから女の笑い声が聞こえる。

「フフフ・・・流石ねルーク、いえ魔王つて呼んだ方がいいかしら？」

声と共に現れたのはルークより少し年上の二十代位の女だった。

「どちらでもいい、だが俺に会いに来るなんてどういうつもりだ？」

「簡単に言つと・・・組織からあなたの抹殺指令が出てるわけで」

「原因は？」

「ブルードラゴンの奇襲作戦を妨害したことと炎帝の作戦を妨害したからだつて」

「ほお～と言つことは、お前は俺を殺しに来たのか？」

ルークは殺氣をヘルに向けて発した。

「ちょ、ちょっと早まらないでよ・・・。分かつてるでしょ？私があんたに勝てないことも、私があんたの味方つてことも」

「まあな・・・で組織の内部情報を集めてくれたんだろうな？」

「あつ！…そうだ、朗報だよ！…お姫様の幽閉されている場所が分かつたよ」

「本当かっ！！何処だっ！！何処にいるんだっ！！！」

今までどうつて変わりルークは目を輝かせた。

「東の『ゲーテル』っていう、組織が抑えてる国があるんだけど・・・

・ その要塞」

「ふつふつふ・・・まさか組織がリーンを捕縛してたとはな・・・

聞いた話だとレーーデンが捕まえていたと思つたんだがな」

「私も驚いたよっ！！今までずっとレーーデンの内部ばつか調べてたからね」

「つまり俺は組織に利用されてたって訳だ」

「そういうことになるんだろうね」

「ツケは倍にして返してやるぜ」

「その意気だよ」

「ありがとな」

いきなりそつけなく礼を言つルークにヘルは目を丸くする・・・そしてルークは何処かへ行こうとする。

「まさかとは思うけど・・・あんた単身でゲーテルに乗り込むつもり？」

「そのつもりだけど」

「あんたは馬鹿かっ！！ゲーテルにはあんたや私と同じ闇系統の魔法使いが五人も配備されていて、その他にも組織の魔法使いがわんさかいるんだよ」

「だからどうした？」

「どうしたつて・・・どう考へてもあんた一人じゃ勝てないでしょ

ルークは少し考へ心底不思議そうに

「なんで？」

と答えた

「なんでつてあんた・・・もういい・・・でも一応私もあんたと同じ姫様を守る三人の騎士の一人だから私も手伝わせてもらひよ」

ルークは少し嫌そうな顔をしながら了承した。

「じゃあ行くか・・・。

「待つて・・・あんたってホントに馬鹿だね、連中に何の挨拶もなしにいなくなっちゃうのかい？」

「悪いのか？」

「悪いねっ！！急に消えちまつたら誰だつて心配するもんさ」「そういうもんなのかなあ」

「いつもあんたなら分かってるはずだよ？」

ルークは小さく「分かった」と言い影に消えていった。

「あの子も一途だねえ・・・まあしょうがない事なんだろうけどね」

そう言つてヘルもぼんやりと薄くなつていき消えた。

ルークが森から外に向かつて歩いているとナイア達が正面から歩いてきた。

「あつ！！」

ナイアはまるで宝物でも見つけたかのように目を輝かせた。

一方ルークは漆黒に染まつた瞳をあまり見せたくは無いいらしく目を合わせようとしなかつた。

「で・・・こんなところまで何のようだ？」

そっぽを向いたまま話し掛けるルークにシルフィイが一瞬怪訝な顔を見せたがナイアがそれを抑える。

「折り入つて頼みたいことがあります」

「頼みたいこと？」

ルークは焦る心を抑えつつ最後まで話を聞くことにした。

説明が終わりルークは少し呆然とする。

何故なら自分が恐ろしい殺人者だというのに気にした様子も見せず喋りかけてきたからだ、しかもその力を借りたいとまで言つている。

ルークは少し考へ「分かった」と小さいが確かに返事をした。

その後ルークは他の生徒達も面倒だから一緒に送ると言い村の中央

に集めた。

何の説明もされずに集められた生徒達はそれぞれが希望や不安を兼ね揃えた顔をしていた。

もはや代表のようになつた六人はスレイスを無駄と知つていながら縄で縛り糸の切れた人形のような漆黒の黒衣の者たちを同じように縄で縛つてルークの前に立つていた。

「準備は良いみたいだな・・・」ちらの呪文の準備も出来ている・・・

・いつでも送れるぞ」

「ではすぐに送つて頂いて良いですか?」

「分かった・・・はあっ!・!」

次の瞬間そこにいるルークを除いた全ての者が暗転した影の空間の中にいた。

そしてシルフィイとナイアとラウとルウとメイの頭の中にルークの声が響く。

「お前達の信じた道を進んでくれ・・・俺も俺の信じた道を進む」  
氣付いた時には緑色の草の上に他の生徒達と同じように横になつていた。

「ここは・・・城の中庭!・?」

ナイアは氣付くなり驚くように立つた。

騒ぎを聞きつけたのか兵士達が周りを囲む

「賊がつ!! 何処から入つた!・・・その顔・・・もしや姫様とアルマ様!・?」

兵士達は一人に氣付くと音よりも速く謝罪を述べた、そして一人の兵士が皇帝へ報告に行つた。

数分も経たないうちに皇帝でナイアの父親でもあるゼルファーがやつてきた。

「おおナイア・・・無事で何よりだ、それよりもビリヤっていいで入つた?」

「そんなことよりも父上申し上げたいことがござります!・!」

「何だそんなに改まつて?」

「この国に三日後敵が攻めてきます」

「敵？ 敵とはどのようなものだ？」

「かなりの戦闘力を秘めた正体不明の組織の魔法使い達です」

「その情報は確かなのか？」

「信用できる情報です」

ゼルファーは少し考え一人の兵士に告げた。

「緊急の会議を収集する、至急散らばらせてある四大将軍達に連絡を取り城へ戻るよう連絡をしろ」

兵士は一目散に外へ駆けて行つた。

「忙しくなりそうだな」

とゼルファーは小さく呟いた

## 第十幕

「済んだのかい？」

ルークの背後から突如ヘルは出現し声をかける

「たつた今済んだところだ・・・お前が言つたとおり別れの挨拶も

ちゃんとした

少し悲しそうに先ほどまで皆がいたところを見る。

「後悔してないのかい？」

「後悔・・・か、無いと言えば嘘になるな、だけど俺にはどんな犠牲を払つてもやらないといけないことがあるからさ」

そして空に向かつて願いを込める。

皆・・・死ぬんじゃないぜ

その時ポツンと地面に水滴が垂れる、ヘルがその様子を見て驚く

「ルーク・・・あんた泣いてるじゃないかっ！？」

「泣いてる？・・・そうか・・・いつの間にか護りたい者が増えてたんだな・・・俺」

ルークは少し懐かしそうに村を見て、涙を一瞬にして拭い険しい眼光になる。

「ランスは何処にいる？」

「ランス？ゲーテルの近くの森にあの後はずつと潜んでるって聞いたけどけど」

「そりゃ分かるけど

「お前の得意技で移動させてくれ」

「はいはい・・・どうせ強制なんでしょう？それに味方はたくさんいるに越した事ないしね」

ヘルは手を地面に置いた。

「続け続け何処までもつ！私影よつ！道となれつ！…」

唱え終わった瞬間ヘルの足元に穴が空く

「出来たよっ！…」

ルークは返事も無しにその穴に飛び込こんだ・

「なつ、礼ぐらい言いなさいよね・・・。」

文句を言いつつヘルもその穴の中に入る。

森の木の影から一人の青年が出てきた、

「ここがランスのいる森か」

あたりを見回すが誰の姿も見えない、その背後の影から続くよつてに一人の女が出てきた。

「ルークっ！先に行くともう送ってやらないわよ！…」

ルークはヘルを一瞥すると森の奥へと足を踏み入れた。

森独特の落ち着かせる空気が程よく気持ち良く、ルークは少し寝たくなつた・・・だがルークは欲求を我慢し先へ進んでいった。

森を歩くこと数分前方に人の気配がしたためルークとヘルは身構えた・・・だが歩いてきた人の輪郭が見え構えを解いた。

「デカイ魔力が現れたからもしやと思つてきてみれば・・・やっぱりティアスか」

「その名前はリーンを助け出すまでは捨てた。」

「じゃあやっぱりルーク？」

「そうだ」

「でもまあ・・・何の因果か知らないが、俺たち三人の姫様の騎士が揃うなんて何事だ？」

「ランス・・・お前はヘルから何も聞いてないのか？」

そしてルークはヘルの方を見る、ヘルは目線をずらし合わせようとしない。

「で、何のようなんだ？」

「リーンの居場所がわかつた」

ランスは絶叫しそうな勢いで狂喜した。

「本当かっ！－！本当なかっ！－！でその場所はつ！－！」

「この近くのゲーテルだ」

その言葉にランスは言葉を失う。

「嘘だろ・・・こんな近くに・・・」

そしてランスは二人に背を向けて何処かへ走っていく。

「何処に行くんだ？」

声が聞こえたのかランスは振り返つて大声で答えた。

「助けに行くに決まってるだろ！？」

二人は急いで後を追つた。

ゲーテルへと入るための門の数十メートル前に隠れるよう二人は伏せていた。

「ゲーテルか・・・結界が張つてあるが・・・入れそうか？」

ランスの問いにヘルは首を振つた。

「私の能力の弱点は一度見たことある場所じゃないと云いつてことと影がある場所じゃないと駄目

つてことと外部から結界へ入れないことだから無理ね

「ルークお前の影なら入れるんじやないか？」

「無理すれば入れるかもしけないが・・・戦闘を考えるとやはり温存はしておきたい」

「そして俺は・・・短距離しか移動できないから無理と・・・じゃあ作戦は一つだな」

ニヤリと笑うルークとランス

「私は戦闘は殆ど専門外なんだけどなー・・・しかもあんた達がやろうとしている事を作戦とは呼ばないわ」と頭を抱えるヘル

そして

「強行突破だ！！！」

ランスが叫ぶとともに三人は門に走つていった。

門の前に立つてゐる六人の兵士は自分達に向かつて来る怪しい者たちを視界に捕らえた。急いで緊急の笛を鳴らそうとした一人の兵士を見てランスはニヤリと笑う。

「気付くのが遅すぎだ」

ランスが皮肉気に話すと同時にランスの影が地面から浮き六本に枝分かれし六人の兵士に伸びていく。

「あの世で後悔するんだな」

言葉か終わらないうちに六本の影の先が剣の形を成し六人の兵士の首を刎ねる。

「相変わらず凄いわね・・・無詠唱魔法なんて」

ヘルが感嘆するようにランスを見る。

「凄くねえよ・・・ヘルには長距離影移動つていう凄い技があるし・・・ティアス、いやルークなんて・・・規格外品だろ?」

「ルークは・・・そうね」

その時二人は会話に入つてこないルークが回りにいないことに気付く、そしてゲーテル内で黒煙が上がりで危険を知らせるサイレンがなる。

「ルークの奴・・・派手にやつてやがるな」

「私たちも行きましょう」

そしてヘルとランスは中に入つていった。

十数人もの兵士達がルークを囲んでいた。だがその囲んでいる兵士達の目には逃げたいと言つ言葉が語られていた。

「ま、魔王・・・。」

一人の兵士がその名を口にすると兵士達は一步引いた。

「組織の幹部様が何故こんなことを・・・。」

一人の兵士が呟くように言つた。

「だ、だがいくらあんたとはいえこのゲーテルの守護隊長の方には勝てないだろ？」

恐怖を噛み殺し笑顔を作る兵士

「そうだつたな・・・人魔六神の六之神じんまろくじん ろくのかみが居るんだつたな・・・忘れてたぜ。」

ルークは渋い顔になり舌打ちをする。

「じゃあいつが出てくる前に仕事を済ましちまうかっ！――」

そして詠唱を始めるルーク、その詠唱を止めさせようと兵士達が一気に駆け寄る、だがルークの詠唱は早かつた。

「断罪の鎌」

そして取り出した鎌を無造作に振るう。すると回りにいたはずの兵士達の上半身が消える、数秒の後空から赤い液体とともに上半身が落ちてくる。それら全て今まさに襲いかかろうとするような目を見開いた状態だつた。

「俺の道はいつも血だらけなんだな・・・。」

そう呟くとルークは先を急いだ。

走っているとヘルとランスに会い合流をした。三人は街を抜けると少し開けた場所に出た。

「あはは・・・こういう場所つてよく敵が罠仕掛けって囮まれるんだよな・・・。」

ランスが頭を搔きながら言うとルークとヘルは苦笑する。

走り出そうとした時三人が同時にその場から飛び退く、次の瞬間先ほどまで居た場所に炎弾や氷弾などが降り注いだ。すかさず持っていた鎌をルークは回転させながら投げつけた。すると何も見えなかつた場所から十六人の魔法使いが現れ鎌を避けた。

「ヤバイな・・・こいつら俺らと同じ近接戦闘も出来る組織の魔法使いだ」

素早い動きを見て三人は頭を抱える。

「おいルーク・・・こいつらは俺とヘルに任せて、姫様の元に行け」  
ランスが突然そんなことを言つたのでルークは啞然とする、がすぐ

に我に返り少し考えて短く言葉を紡ぐ。

「頼む」

そのままルークは魔法使い達の脇を抜けようとする、だが相手も黙つてみているはずがなくルークに攻撃をしようと詠唱を始めようとする。ところがランスの足元から伸びた影が魔法使い達を襲い魔法使い達は詠唱を中断し避ける。

「姫様とティアスの時を隔てた再開を邪魔する奴は・・・死んでも文句は言えないぜっ！！」

ランスの気迫が勢いを増すとともにランスの影が回りの影を吸収し大きくなり始める。

「見せてやるぜ・・・本当の影の恐ろしさって奴をな」

不適に笑みを浮かべてその場に立つ姿はまるで勝利を確信しているようだった。

「あらら、それ使うんじゃ私は必要ないわね？」

ヘルはそう言うと影の中に入つて消えてしまった。

ランスの影は自分と同じぐらいだつた影が五十倍ほどになつていた。

「行けッ！！」

ランスの掛け声とともに影から五十体の大型の物体が現れた、その手の部分には黒い剣が持たされていた。影によつて出来た五十体の大型は生まれるとともに十六人の魔法使い達に突撃して行つた。

魔法使い達は慌てた素振りを見せせず詠唱をし魔法を放つた。炎弾、氷弾、鎌風、雷撃が続けざまに放たれ轟音が轟いた。砂煙が巻き起こり何も見えなくなつた。この隙に攻撃を仕掛けようとし砂煙に五人ほど突つ込んだ。その瞬間ランスの声が当たりに響く。

「勘違いしてないか？こいつらは人じやない・・・影だぞ？」

同時に砂煙の中で何かが動き鮮やかな血飛沫が辺りに舞う。

砂煙が晴れると首がなくなつたり腕が半分ちぎれたり胸の辺りに大穴が開いている影の人型が動き回つておりそのボロボロになつた黒い剣で五人の魔法使いを解体していた。

「さてと・・・後十一人、次に死ぬのは誰だろうな？」

そして影の人型はまた走り出す。

## 第十一幕

街の中心にある要塞にルークは着いていた、途中に予想していた妨害がなかつたため少し拍子抜けしていた。

「何はともあれ・・・行くか」

そしてルークは要塞の中へ入つていった。

要塞の中は全くの無人で無用心だとも思つたが同時に罠があるかもしれないという不安が現れてきた。

要塞は色々な隔壁が緊急時の為下りてあり下手に暴れるよりかはそのまま進もうとほぼ一直線に進んでいった。

進んでいくと少し大きめの部屋に着いた、それはまるで闘技場と呼ばれるような円形の部屋だつた。その部屋の真ん中に一人の男が立つていた。男を見たルークは全身が強張り緊張した様子でごく自然に呟いた。

「六之神・・・『暴君』グラウス・・・」

次の瞬間グラウスとルークが同時に詠唱をする。

「影よ、<sup>ゴーレム</sup>舞え！」

「土人形の豪腕」

ルークの足元から数本の影の針がグラウスを襲おうとしたが突如床から出てきた巨大な土の腕に握りつぶされてしまった。

「まだ・・・まだこんなものでは足りないぞ魔王っ！！もつと闘争を殺意を本能を俺に感じさせてみろっ！！」

いきなり叫んだグラウスに啞然としたルークだつたがグラウスの二つ名の理由を思い出したので思わず頭が痛くなつた。

「そんなに戦いが好きならお仲間とやつてろ・・・俺は忙しいんだつ！！」

ルークの声に答えるように握りつぶされた影が脈打ち土の腕を壊しつに交わり螺旋状の針へと変わる。針は高速回転をしながらグラウスを襲つた。

「土より石を石より岩を岩より山をつ……」

次の瞬間部屋全体が揺れ、部屋中にひびが入り要塞が崩れた。凄まじい轟音とともに先ほどまで要塞があつた所に小さい山が出来ていた。

「もう終わりか？魔王よ……しかし要塞に兵士がないことを不思議に思わないとは愚か者だな」

出来上がった山の頂上に笑みを浮かべたグラウスが立っていた。その時瓦礫の一つが動いた、と同時に濃厚な殺氣と呴くような声が聞こえる。

そして現れたのは黒い球体外壁が剥がれる様に落ち、その中には小さい声で呴くルーケがいた。

「貴様に一つ聞く……リーンと言つ女の子はしつかり非難させたんだろうな？」

願うような声でルーケはグラウスに聞いた。するとグラウスは笑みを浮かべながら答えた。

「兵士以外はここで全員殺す計画だ。」

その言葉を聞いた瞬間先ほどまで漂っていた殺気が消えた。そしてルーケにも変化が現れた。

涙を流しながら狂うように笑っている、その光景は万人が狂人と呼ぶような光景だった。

「あはっ、あははははっ！」

天を仰ぐように空を見上げルーケの動きは止まった。

「あまりの衝撃に狂つたか……まあいい、狂つた者など興味はない……ここで死ね」

冷淡な言葉とともに山が先ほどの大腕のような形に変わっていく、そして拳を固めて巨大な岩の拳がルーケを襲つた。

「死神は歓喜し神々は逃げまとう、来い呪われし剣」

その詠唱は岩の拳が襲うまでのたつた一瞬という速い詠唱だったが、グラウスにはその一言一言が鮮明に聞こえた。

そして岩の拳に黒い閃光が貫通しバラバラに崩れ落ちた。グラウス

はその光景を驚きの表情で見つめた。

「何年ぶりだろうな、魔剣を使うのは・・・リーンが使うなっていつた時以来使ってなかつたからな・・・でももつ使っても良いよなリーン」

ルークの姿は黒衣ではなくルークの家の地下にあつた漆黒の鎧と逆十字のネックレスをかけた姿に変わつていた。そしてその手には黒い刀身の剣が握られていた、その黒い刀身には四つの紫の小さな玉がついていた。

「くつくつく・・・本当に面白いな・・・まあ心行くまでこの闘争を楽しもうぞっ！！」

そしてグラウスは詠唱を始める

「地底より出でよ！！大地の巨人よ！！」

そして大地に地割れが起き地底から岩の巨人が現れた。ルークは岩の巨人に向かつて行き魔剣で貫こうとした、だが魔剣は固い岩の巨人に弾かれた。

「そんな剣など通用せぬわっ！！」

そう言い放ちながらグラウスは岩の巨人で攻撃を放つた、その巨体に似合わない岩の巨人のタックルのスピード、ルークは避けることが出来ずともにタックルをくらつた。

軋む体中の骨の音が頭の中で反響し口からは危険な位の量の血が吐き出された、だがそれでも一命を取り留めていたのは、漆黒の鎧のおかげのようだつた。

ルークは魔剣を杖代わりにしながら立ち上がり、今まで片手で持っていた魔剣を両手で持つた。魔剣自体両手剣らしく柄の部分が少し長めに出来ていた。

「見せてやるよ・・・魔剣の能力を・・・」

ハッタリだと思ったグラウスは岩の巨人に攻撃を命じこれで勝負が終わると思い背を向けた、この時のグラウスは気付かなかつた。この慢心によつて自分が負けることを・・・。

少し目を離した事が戦場では致命的なミスになることをグラウスは脇腹に負った大きな傷を見ながら思い出していた。

正気を取り戻した今でも何が起きたのか分からなかつた、分かることといえば巨大な何かが岩の巨人を破碎し自分を掠めたことぐらいだつた。

掠めただけで左の脇腹が抉られた・・・直撃をしたらと考え若の巨人の状態を思い出し少し冷や汗が出た、そして自分にここまで怪我を負わせた若い青年に賞賛の眼差しを送つた。

ルークは無理に体を動かしたので息も絶え絶えだつた、だがまだ決着は付いていなかつた。体に無理矢理命令を下しグラウスに歩み寄る、ルークの心にあつたのはリーンを殺したグラウスへの復讐心だけだつた。

「なかなかやるな・・・魔王」

はつきりとした言葉でグラウスが喋つたのでルークは驚いた、ルーグが傷つけた脇腹の傷はなくなつていた。

「馬鹿な・・・あの傷が回復しただと！？」

目を疑い驚いたルークだつたが同時に自分の最後の時が来たと思つた、だが次にグラウスの口から出た言葉にルークは啞然とした。

「なかなか面白かったぞ魔王よ・・・俺をここまで楽しませた褒美だ取つておけ」

そしてグラウスが指を鳴らすと同時に壊れた要塞の瓦礫が左右に分かれ片付き階段が現れる。

「この階段の入り口には物理結界が張つてある、瓦礫ぐらいでは傷つかぬほどのな」

「それはどういう・・・」

ルークは、意味だと言葉を紡ぐはずが口がパクパクと魚のようになつてしまつた。

ルークの目線の先には、同じ年位の女の子が立つていた。ルークの

目から涙が流れていった。そして涙を拭つて少し涙に濡れた目を向けてこう言つた。

「少し遅れたけど・・・迎えに来たよリーン」

そしてリーンと呼ばれた女の子も目を潤ませて答えた。

「信じてたよ・・・ティアス」

だがリーンの顔が少し険しくなる、リーンの目線を負つてみると自分の手の方向にいつている事に気付き慌てて魔剣を隠した。

「こ、これは・・・」

「ティアス、約束を破つたのね」

リーンの気迫に後ずさりするルークだがリーンの気迫が消えていくのに気付いた。

「こんなに怪我をして・・・死んじゃつたら元も子もないじゃない・・・。」

「ごめん」

数十秒沈黙が続き、その沈黙をグラウスが破つた。

「良い雰囲気で申し訳ないが俺はそろそろ帰らせてもらおう・・・魔王・・・今回は負けたが次はそうはいかぬからな」

そしてグラウスは端に除けた瓦礫で巨人を作り出しそれに乗つて何処かに行つた。

「そうだリーン、ヘルとランスも来てるんだっ！――人の所へ・・・うぐっ」

うめくと同時にルークは倒れこみ魔剣と漆黒の鎧は消滅し服装は黒衣に戻つた。

「だ、大丈夫なの！？」

「平気だよ・・・少し休めば元気になる」

そしてリーン支えられるように一人の下へ行くと何故かランス一人がそこに座つていた、回りには襲つてきた魔法使い達の死体があつた。

「あれ、ランスお前一人か？」

「ヘルは戦闘が始まるなり何処かに行つちました。・・・それより

も俺はお前を何て呼べば良い？ティアスか？ルークか？

「ティアスに戻る・・・放浪人ルークとしての仕事は終わつた。これからはリーンを護る騎士のティアスとして生きていく」

「分かつた・・・よろしくなティアス」

「あ、改めてよろしく」

「んで少し話は変わるけど・・・これからどうする？」

「組織に借りを返すしかないだろ？」

「そう言うと思つたぜ」

二人が笑いあつてると背後からヘルが現れた。

「おまたせえ～っ！お姫様無事でよかつたです！！！」

「ヘルお前今まで何やつてたんだ？」

「良くぞ聞いてくれましたっ！！闇系統の魔法使いを片つ端から不意打ちで倒してたんだよ！！」

とランスの問いにヘルは胸を張つて答えたが、三人の視線が痛かつたのは言つまでもない。

「そ、それよりこれからどうするか相談してたけどレーデンに行かない？」

「馬鹿言つなっ！！姫様や俺たちの国が奴等にどんな目に合わされたのか忘れたのか！！」

ランスの怒り様にビックリしたヘルだがティアスにあんたはそれで良いの？と目で訴えた。

「俺は・・・できる事なら行きたい」

「ティアスまで何言つてんだ！？」

「ランス・・・レーデンは組織に狙われてる・・・組織に狙われた国がどうなるのか組織に入らなかつたお前でも知らないはずじゃないだろ？」

「狙われてるのか？」

「ああ・・・あそこには世話になつた皆がいる・・・だから行かせて欲しい」

そしてティアスは頭を下げる

「ちょ、やめろって……分かったから」

「リーンも良いか？」

「ティアスの思いを止めることは私には出来ませんから」

とリーンは笑つて答えた。

「決まりみたいね……じゃあ一気にレーテンまで飛ばすけど良い？」

三人は頷いて答えた。

「続け続け何処までもっ！！私の影よっ！！道となれっ！！」

そして四人は影に吸い込まれていった。

グラウスは瓦礫の巨人を止めていた、脇腹からは血が滲み出でていた。  
「土で応急処置をしたのはいいが……やはり完全には止まらぬか  
そして脇腹がボロボロと崩れ傷が露になる、先ほどまで脇腹の肉だ  
ったものは崩れると砂になつた。

「ふう……他の奴等になんて言い訳をするか……。だがまさか  
世に存在する五つの神具以外にもあれほどの力を持った武器が存在  
するとは……魔剣と言つていたか？」

グラウスは重症にもかかわらず、珍しく考え方をしていた。  
そしてそのままグラウスは目を瞑り意識を手放した。

## 第十一幕

ナイアは城の中の自分の部屋で始まつたであらう会議のことを考えていた。実は一行が着いてから一日という時間が経つており一日の間に解決した問題がいくつかあつた。例えば魔法学校の生徒達の対応だ、魔法学校の生徒達はレー・デンに着いたその日に一人一人に援助金が支給されることが決定し希望するものはレー・デンの魔法学校への転入も手配するという処置がされた。

だがシルフィーとラウは転入を拒みナイアの護衛をしたいと言い出していた。最初は断つっていたナイアだつたが熱心に頼みこむ一人に負けて護衛として雇うこととなつた、この時アルマは何の異論も唱えず逆に一人を応援していたのはナイアには秘密である。

そして無事仕事を終えたルウとメイだつたがレジスタンスの一員ということを隠したこととアルマの取り計らいもあり少しの間レー・デンに居る事となつていた。

そしてこの日事情を聞いた皇帝のゼルファーに呼ばれたアルマを含めた四大將軍の『青龍』ハザン『白虎』ザックル『玄武』ドゥガスが一つの部屋に集まつていた。

四人が席に着いたことを確認しゼルファーが口を開いた。

「さて、皆揃つたようなのでそろそろ話し合いを始めたいと思うが・・・大まかなことは伝えた通りだ」「言いづらいことなんだが・・・その幹部を倒したのはハーゼンデルの生き残りだ」

四人が「馬鹿なつ！？」という顔でアルマを見るがアルマは顔色を変えない。

「その様子だと本当なのだな、しかしハーゼンデルか・・・あの国にはすまないこととした」

「皇帝の責任ではありません・・・全てはあの宰相が起こしたことですから」

と頭を抱えるゼルファーをハザンがフォローする。

「・・・敵の正体なんて明日になつたら分かるんだろう? だつたら今は正体なんかじゃなく作戦を練ろうぜ」

ザックルの言葉にハーザンデルの問題は一時置いておくこととなつた。

「さて作戦を立てたいと思うが・・・言いたいことはないか?」

そしてアルマが静かに立ち上がつた。

「一つ言つておきたいことがある、敵の出現方法についてだが・・・

奴等は影を使って現れると思われる」

「影だと?」

「ああ影だ・・・報告書にもあったとおり、奴等は闇系統を魔法を使うことのできる、闇の魔法使いがいる。その闇の魔法使いの技の中に影を使った移動があるのだが・・・これを捉える事はハッキリ言つて不可能だ。」

「不可能だと? それでは敵の現れる場所が分からないと?」

「そうとも言えない・・・どうやら影の移動法は影を繋げることによって出現する、そしてレーデン周辺で影が多くできるところといえば一つしかない」

「忘却の森だな?」

ゼルファーの言葉にアルマは頷いた。

「ですからこれから私は忘却の森へ兵を率いて行つて来たいと思ひます」

「分かつた・・・一応ドウガスは城に残つてもらうとしてハザン、ザックル、お前達はどうする?」

二人は笑みを浮かべて答えた、

「もちろん向かいますよ」

「そつちの方が面白そうだ」

そして三人は部屋を出て行つた。

「では、私もこれで」

ドウガスも皇帝に挨拶をして外に出て行つた。

「ふう・・・これで心配なのは、ナイアだけだな・・・しつかり

城で静かにしてくれていたらしいのだが……」

そしてゼルファーは大きく溜息をしてその部屋を出て行つた。

ティアス、リーン、ヘル、ランスの四人はレーデン内の服屋にきていた。

ヘルの手には色々な服が持たれていて、リーンを見ては「こっちが良いかな・・・こっちも似合うな・・・」と声を漏らしていた。ティアスとランスはそこから早々に服屋から立ち去つて外で待つていた。一人の服装は黒衣ではなくタキシードと呼ばれるようなピッシリした服だつた。

「何でこんな動きにくい服を着なきやならないんだよ・・・。」

ティアスの愚痴にランスが苦笑いを浮かべていた。

「しかしこんな服を着る意味は分からないが服屋に来るのは当然だろ?」

「まあリーンの格好があれじゃな・・・。」

と言つてティアスはリーンの見つけた直後の服装を思い出した。重症で気が付かなかつたがリーンの服装はボロボロで正常な状態のティアスでは話すことはおろか見る事だつて恥ずかしくて出来ないほどだつた。

まだ戦いのダメージが残つているティアスのタキシードの下は包帯でグルグル巻きだつたりする。

そして待つこと数十分二人がやつと服屋から出てきた。

二人とも体のラインがハッキリと分かるような黒いドレスを着ていた。

「どうだい、綺麗になつただろ?」

と胸を張つてヘルが自慢をしリーンは恥ずかしいらしくヘルの背後に隠れた。

ティアスとランスは久しぶりにヘルに同感だと思つた。

「ところで何でこんな服装にならないといけないんだ？」

ティアスの質問に「秘密」と口の前に一指し指を立てて答えた。さらには聞いただそうと思つたティアスだがヘルがそのまま道なりに歩いていつてしまいしようがなくついていく事にした。

そして着いたのはレー・デンの城の城門だつた、まったくヘルの意図が掴めないまま黙つているといきなりヘルが城門の兵士に話し掛けた。

「城に入りたいんだけど入つて良い？」

その質問に唖然としたティアス達と兵士だつたが、その一瞬で怪しい者と兵士は判断したらしくヘルを捕まえようとした。

兵士も城門の守りを任されることもあり普通の兵士より多少強そつたが、所詮は多少強い止まりだつた。ヘルは繰り出される槍を滑らかな動きで避け兵士の懷に入り込むと兵士の額を人差し指で突つつきながら諭すように言つた。

「中々良い動きだけれど・・・私と踊るにはもう少しあと強くなることね」

そう言つてから兵士の足を払い転ばせた。

だが続々と騒ぎを聞きつけた兵士達が四人を囲んだ。

「これが作戦だつたのか？」

ほぼ呆れながらティアスが聞くと

「おかしいわね・・・私の美貌が通じないなんて」

と本氣で言つていたので三人は酷く止めなかつたことを後悔した。そしてランスが三人の前に出て地面に落ちていた持ちやすそうな木の枝を拾うと兵士達に向かつて行つた、前方に三人左右に一人ずつと兵士の位置を確認し軽く棒を振るうと五人の兵士が転んだ、兵士達は何が起きたのか分からず顔を見合させ立ち上がろうとしたところでまたランスが棒を振るうするとまた兵士達が転ぶ、兵士達は気味悪がつて倒れたまま後ろに這つて行つた。

ティアスとヘルの目にはランスが相手の下の影を操つて足を引っ掛けたのが見えていたので声を殺して笑つていた。

不意にランスに向かつて短剣が投げられた、速度も狙いも今までの兵士とは全く違つた的確なもので避けられないと判断したランスは足下の影を盾にして攻撃を防いだ。

「やるじゃん」

そう言つて白い毛皮を纏つた男が現れた。

「誰だ貴様・・・。」

睨みつけながらランスが問い合わせると男は笑みを浮かべながら答えた。

「レーデンの四大將軍が一人『白虎』のザックルだ、しかし今の攻撃を防いだ術・・・見たことなかつた技だが噂に聞く闇系統の魔法か？」

その言葉に少し驚いたランスだったが溜息をつきながら頷き肯定した。

「そうか・・・ということは、明日この国を襲うための下見か？」

「何のことだか分からないな」

そう言つてランスはザックルに向けて挑発的な笑みを浮かべる。

「そうか、しらを切るつてなんなら・・・その体に教えてもらうつとするかっ！」

その瞬間ザックルは両手にハグナクと呼ばれる刃物の爪をつける。

「貴様は強そだから手加減は出来ないぞ」

ランスも影を数本の剣に変えた、剣の柄の部分には剣と影を結ぶようにながついている。

「雷神よ、我が爪に・・・つてうわっ！－」

ザックルは詠唱を途中で止めランスの作り出した剣を紙一重で避けれる。

「え、詠唱無しかよ・・・これが闇系統の魔法か・・・。」

ティアスは心の中で「いやいやそいつだけだから」とツッコミを入れていた。

襲い掛かる多数の剣を避けたり、爪で弾いたりしながらザックルは詠唱をする隙を伺つていた・・・だがランスには全く隙が見つかっていなかった。

なかつた。

「上等じやん・・・ならこれでどうだつ！！」

一気にザックルの速度が剣が追いつけないほど上がり剣を無視しながらランスに迫つていつた。そして残り数センチでザックルの攻撃がランスあたるというところでザックルは嫌な予感がして絶好の攻撃のチャンスを捨ててランスから離れる、そして刹那の隙も与えずランスの周りに影の剣の刀身が突き出た。

「よく避けたな」

素直にランスはザックルを讃めたがザックルは初めて負けるかもしないと思った。しかし何かを戦闘中に考えてしまうということは格好の隙となつてしまつた。ザックルの足に影が絡みつき足を拘束する。

「残念だつたな・・・年の若さのせいってこともあるかもしれないが、もう少し先ほどのように集中しておけば捕まらなかつたのにな」そして影で作った剣を一本取つてランスは勝負を決めようとした・・・だがランスの足は地面を踏み込むことなく穴に落ちる・・・ヘルの作った影の穴に、

「へ、ヘルつ！！今勝負中なんだが・・・」

「勝負決まつてるでしょ？それ以上の事をしたら弱いもの苛めだよ。

「ヘルの悪意無き言葉の一撃がザックルの心に突き刺さる。

「弱いもの・・・苛め・・・。」

ザックルは戦意を失い咳き始める。

「生殺しつて酷いよな・・・。」

ティアスの口から同情の声があがるがヘルは全く気付かなかつた、不意にリーンがランスに拘束を解くように命じザックルに近づいていき、意氣消沈しているザックルに「気にしないでください」と言った。

その時リーンに向かつて風弾が飛んできた、大気を圧縮した弾丸がリーンに直撃しようとした瞬間ティアスが底うようにして身を盾につた。

した。そして風弾が炸裂しティアスとリーンが吹っ飛ぶ、直撃を食らわなかつたリーンはすぐに起き上がつたが、直撃を食らつたティアスは直撃した部分と思われる背中側の服が破れ包帯が露になつた。

そして風弾を放つたであろう男が悠然と歩いてくる、

「だらしないですねザックル・・・同じ四大將軍として恥ずかしい」「ぐつ、ぐつ、うるせえ・・・大体なんでお前がここにいる?」

「何故つて忘却の森に行くからに決まつているでしょう?」

そして二人の会話はここで終わつた。

「あんた誰? てかティアスとリーンの一人に何してんの?」

怒りを堪えるようにヘルが聞くと男は名乗つた。

「私は四大將軍のハザン、これでも『青龍』の二つ名を授かつています」

「そう・・・もういい死んで」

言い終えるとヘルは影の中に入つて消える、そしてハザンの足下の影からヘルの手が出てくる手にはナイフが握られており、ハザンは足を浅く斬られる。

「小癩なつ!!」

ハザンが怒鳴ると何処からかヘルの声が聞こえてきた。

「小癩? 馬鹿言わないでくれる? 先に私の大切なものに手を出したのはあなたよ? 大体無力な女の子を狙うなんて万死に値するわ」

言葉が言い終わるとヘルが影から現れた。

「さあ、現れてあげたわ? でも私に貴方の攻撃が当たるかしら?」

ハザンは鼻で笑うと詠唱を始める

「我等を見守りし大いなる風よ、我が前に集い烈風となれっ!!」

詠唱を終えると同時に周りの風が凶器となつて襲い掛かつた

「開け深淵の扉っ!!」

ヘルが唱えると黒い扉がヘルの前に現れる。凶器と化した烈風が目前に迫る中黒い扉は音をたてて開かれる、と同時に今まで荒れ狂つていたはずの風の存在が消える。

「さてと・・・この魔法結構魔力使うから・・・これで決めるわよ  
そしてもう一つハザンの前に黒い扉が現れる、そして扉が開くと扉  
の中から勢い良く風が吹き荒れハザンを襲う。ハザンは何の抵抗も  
出来ず吹き飛ばされもみくちゃになりながら地面に落ちる。  
「自分の魔法にやられるなんて無様ね」

と言つてヘルは笑つた。

「本気になるなんてお前らしくないな

ランスの言葉に

「私がやらなかつたら貴方がもつと酷い目にあわせてたでしょ？」  
とヘルが答える、ランスも図星だつたらしく頭を搔く。

「今日はティアスが怪我しちやつたし帰りましょう

「そうだな」

そしてランスはティアスを担ぐと城門を後にした。

ザックルは四人が帰つていいくを見つめることしか出来なかつた。

四大将軍であるザックル、ハザンの敗北はレーーデンの兵士達の戦意を喪失させるには十分すぎた、異様な敵、全貌の見えない組織、圧倒的な力、恐怖の種は新たな恐怖を生み経つた半日で兵士達の間には嫌な空気が蔓延していた。

ザックルは体には傷を負わなかつたのでまだ良かつたが問題はハザンの方だつた、命に別状は無いものの決して動けるような体ではなかつたためレーーデンはハザンという、持ち駒を一つ失う事となつた。そして森で陣を構えていたアルマにもその情報は伝えられた。

「馬鹿なつ！！」

怒号とともにテーブルに手を打ち付ける音がテントから漏れる、息の荒い若い男をアルマは黙つて見据える。

「馬鹿など言つておらん・・・私は今回襲つてきた奴等が本当に敵だつたのか分からぬと言つただけだ」

「それがおかしい事だと言つているんですつーー現にこちらには怪我人も出でているんですよつーー！」

若い男は幾分頭が冷えてきたのか声の大きさがだんだん絞られてくる。だがそれでもアルマに対しても抗議の眼差しを止め様とはしない。

「ヘイルお前の言つていることがわからないと言つてゐるわけじゃないぞ、ただもう少し情報を正確に掴み取れといつてゐるだけだ」「話は・・・もう終わりですか・・・。」

「いや、兵士達にすぐに闘える用意をじとくよつて言つておいてくれ・・・私の勘だと・・・敵がくるのは夜だ」

「分かりました・・・。」

ヘイルと呼ばれた若い男は一礼してテントから出て行つた、アルマ

はそれを見届けるとテントの脇に置いてある槍を手に取った。

「我が部隊は五百・・・敵はどの位だろうか・・・。」

そう呟くとアルマもテントから出て行った。

ナイアはシルフィーとラウを連れて地下の収容施設に来ていた、目的はスレイスに会う為了だ。

警備をしている兵士に一回一回丁寧に挨拶をしてナイアは進んでいった。

案内されたのは、白い大きな部屋だった。責任者のような兵士に待つように言われて待つこと数分、突然前方の扉が開き五人の兵士に連れられるようにしてスレイスが出てきた。

「しかし姫様は何故このようなところへ？」

と言つ責任者のような兵士の質問に対し

「私用です」

と簡単に答えた。

「ここにちはナイア嬢、この私に面会とは物好きですね」

「物好きで結構ですよ・・・さて、本題に移ります。これから貴方をここから出します、約束でしたしね。しかしここを出るにあたって三つの制約がかせられうことになりました。一つ目は、私の監視下に入ること、二つ目は、無断での魔法の使用を禁ずること、三つ目は、無断での戦闘行為を禁ずること・・・これらを守つていただけますか？」

「フツ・・・守らないと出られないのでしょうか？なら守りますよ」とスレイスは微笑を浮かべて答えた。

その後ナイア、シルフィー、ラウ、スレイス等四人は各種の手続きを分担して済まし城外へ出て行き街へ向かつた。

街の中央にある宿屋の一室に青年が一人死んだように眠っていた、青年の周りには心配そうな顔を浮かべる者が三人いた。

「ティアス……目を覚まさないね」

ヘルがか細い声で言つた、その言葉にランスとリーンが俯いた。

「私の……私のせいです……私が不用意に近づかなかつたら……」

「姫様のせいじゃないぜ……ティアスだつてすぐに目を覚ますさ」そして部屋に沈黙が訪れる、誰一人として喋らない空間がこのまま続くかに思えたときだつた。

「うう……ん？ ありや？ 何で宿で寝てるんだ？」

その言葉にリーンは顔を輝かせる、そしてヘルとランスが安堵の表情を浮かべる。

「ティアスっ！ 良かった……本当に良かつた、死んじやうかと思つたよ……」

リーンが嬉しさのあまり抱きついてきたので、ティアスは固まる。そして身体中の血液が顔に集まつたのではないかというくらい顔を赤く染めた。

「リ、リーン……ち、近いぞ」

全ての力を振り絞つて言つた言葉にリーンは冷静を取り戻し改めて自分の行動を考えてみる……身体は密着し顔はかなり近く相手の息が届く……今度は逆にリーンが顔を真つ赤にし後ろに飛び退いた。その光景を「微笑ましいねえ……」とヘルとランスが笑つていた。

その後リーンがご飯を買ってくると言つて、護衛にランスが着いていた。ヘルと二人つきりになると突然ヘルがティアスの包帯を変え始めた。

「ティアス……姫様を思うのはいいけど痛いときは痛いつて言わないと……」

そして包帯の背中の部分にはかなりの量の血が滲み出ていた。

「何時から気付いた？」

「あのねえ・・・姫様に抱きつかれた時に脂汗を垂らしてたら誰だつてわかるでしょ」

そう言いながらヘルはティアスの包帯を替え終える。

「今回の戦い、言いたいことはたくさんあるけど・・・その傷なんだから無理だけは、しちゃ駄目だよ」

「分かってる・・・だけど、リーンに危険が及んだ時は・・・」

その時ティアスの目に何かが宿ったのをヘルは見逃さなかつた。

「大丈夫・・・そうなつたら私・・・優しさを捨てるから」

と言葉の裏に大きな悪意を隠してヘルが答えた。

そして扉が開く音がした。

「美味しそうなものがいっぱいあつたよっ！！」

とリーンが嬉しそうに語つた、見ていたティアスとヘルの顔も自然に緩んだ。

遅れてランスがやつて来た時には、夕食が始まっていた。

そして食べ終わつた四人はさつきまでとはうつて変わつて真剣な顔つきになる。

「組織の行動パターンから敵が現れるのは零時だと思う」

ヘルの言葉に三人は頷いた。

「零時まで後三分・・・一体何が起きるんだろうな」

ランスが生睡を飲み込みながら問うが答えは誰からも帰つてこない。

「では行きましょう」

リーンの言葉に三人は頷き、四人は宿屋を後にした。

そして零時・・・轟音がこの地域を包み込んだ。

## 第十四幕

今日と明日の狭間の時間零時、突然轟音が鳴り響きレーーデン国内の兵士達の身体が自然と固くなる・・・。

そして、轟音の発生位置に程近い忘却の森に拠点を構えるアルマは隊列を崩さぬようにしつつ回りを警戒し轟音のした方向へ向かった。轟音はまだ続いている、そしてアルマは前方の木々が次々と地面に飲み込まれてしていることに気が付いた。それからの判断は早かつた、すぐさま兵士達に後退するように命じ自身も急いで後退をはじめる。背後から轟音が近づいてくる、それに伴いアルマの軍勢の足も自然と速くなる。

そして気が付くとアルマの軍勢は忘却の森の外へと出ていた。そこで轟音が止む、アルマは振り返り忘却の森の方向を見るとそこには、木々が一本残らず消えていた、そして次の瞬間地面から何から出てくるのが見える・・・出てきたのはなんと腐乱したモンスターや人間のゾンビだった。

そのゾンビの集団は、圧倒的に多かった。ざっと見たところ五千はゆうに超える敵の数・・・そしてアルマの軍勢は怒号とともに突撃していくた。

個々の実力はこちらが上回っていた、兵士達は鼻につく異臭を物ともせずゾンビ達を駆逐していった。

アルマは最前線で戦い炎を纏わせた槍でゾンビ達を灰にしていった。そしてアルマは敵の集団に槍を投げ込む、投げた槍は進路上の敵を貫きながら進んでいく。

「爆ぜろっ！！」

アルマの声に反応するように槍は爆発を起こす、爆発は半径三十メートルにも及び小さなクレーターを作った。

爆発を見た兵士達は歓喜し、士気が上がつていつた。

その爆発はナイア達にも見えていた。

「ほおー・・・流石は火の神具『炎槍ロドアド』ですね。いやはや火の系統の魔法使いとして憧れの一品ですね。」

スレイスが嬉しそうに言う

「炎槍ロドアドってなんだ?」

ラウの問いかに三人は驚いたように顔を見せる。

「ラ、ラウ・・・貴方学校の授業を聞いた無かつたの?」

呆れたように言つシルフィの質問にラウが迷いなく頷いたので深く溜息をついた。

「あのねえ・・・炎槍ロドアドって言つのはスレイスが言つた様に火の神具なの、神具には他にも四つの物があつて、水の神具『水槍ミラード』雷の神具『雷斧バルディ』地の神具『地鎧グーラーダ』風の神具『風剣ファンス』つて物があつてロドアドと同じ力位を持っているの、そもそも神具つていうのはそれ自体に絶大な力を秘めた武器のことを指していく・・・つまり物凄い武器なの喋りつかれたのかシルフィは最後分かり易くまとめた。

「そうなのか・・・でも待つてくれ・・・それじゃあ光と闇の神具は無いのか?」

「理論的にはあるわね・・・でもそんなもの誰も見たことないわ。殆どの人たちは、見たことないもの・・・いわゆる未知の物を存在しない物として見てしまつてわけ、闇系統の魔法をこの目で見る前の私たちがその存在すら信じてなかつたようにな」

その言葉に三人は思わず頷いた。

「さてと・・・質問は・・・もう無いわね?じゃあ行きましょうナ

イア様」

ナイアは頷いて歩いていく・・・向かった先は爆発の起きた忘却の森の方向だった。

「うわあ・・・嫌な空気」

そう呟いたのはヘルだった。

「そうだな」

とティアスが頷く、四人はレーデンから少し離れた場所に立つていた。前方三キロ程の所には粉塵が上がっており戦闘が続いているのが見て取れた。

「早く行きましょう・・・兵士さん達を助けないと」

リーンの言葉に進みだそうとした時だった、背後から結構な速さで近づいてくる気配を感じ三人はリーンを囲むようにして立つ、気配は四つだった。

段々と姿が見えてくるにつれてティアスとヘルの表情が変わってくる。ティアスは驚いた顔で呆然としヘルは笑いを堪えた様子だった。二人の様子にリーンとランスは首を傾げるばかりだった。向こうもようやくこちらの様子に気付き驚いた顔をする。そして相手の女が驚愕の声を出す。

「ル、ルーク！？あんたなんでこんなところにいるの！？」

一行はナイア、シルフィ、ラウ、スレイスだった。

「ルークって誰？」

リーンの言葉にティアスは

「さあな・・・人違いじゃないのか？」

と答えた。

一方シルフィはティアスの言葉に怒ったようで、ティアスに近づいていった。

「人違い？そんなわけないでしょ！？」

そう言いながらシルフィは殴りかかる、そんな行動に出たシルフィにナイアとラウは驚いた。

少し前までいつも様に殴っていたコースと角度、あたると思ったシルフィの思惑は脆く崩れた。

ティアスは、シルフィーの攻撃を半歩下がるだけで交わし軽く足を払つて転ばせる、シルフィーは豪快に転び背中から落ちる。

「いきなり殴りかかってくるなんて・・・一体どういうつもりだ？」  
ティアスはそう言いながら転んで仰向けになつたシルフィーを睨みつける。

シルフィーは言い返そうとするが転んだ衝撃で正しく呼吸が行えず、声は咳き込むだけとなつた。

「ティアス・・・女性にそれはやりすぎです」  
リーンが少し怒つたように言つたので、ティアスは黙つて二人のもとに戻つていつた。

「ルークっ！お前っ！！」

次に殴りかかるうとしたラウを自身の影が縛り付ける。

「事情はよく分からんんだけどよ・・・こいつはルークじやなくてティアスだ。それに仲間なんでね、喧嘩するんなら相手になるぜ」  
ランスがそう言つとラウを縛っていた影の締め付けが一層強くなる。  
「ランスもやめて下さい」

リーンの言葉にランスは大人しく従いラウを拘束する影を解いた。  
ラウは、片膝をついて呼吸を整える。

「ティアスとランスがすみません」

リーンがナイア達四人に謝るとナイアは氣付く、

「もしかして・・・貴女リーンさん？」

ナイアの言葉に驚いた顔を見せるリーンだだつたがしつかりと頷いて答えた。

「やっぱりそうでしたか・・・確かにあの絵の面影は残っていますね。」

「・・・ところでティアスと知り合ひのようですが？」

絵という言葉が気になつたがそれよりも気になつていたことを聞いた。

「そうですね・・・ちょっとした知り合ひですね。」  
とナイアは微笑を混ぜて答えた。

「ナイア・・・何故炎帝がそこにいる?」

そこで初めてティアスが自分から喋る

「スレイスは私たちの仲間になりました。」

その言葉に驚いたティアスだったが「そつか」と小さく呟き静かに歩いていった。

「ティアス先に行つては・・・すみません失礼します。」

そう言つてリーンはティアスの後について行つた。

「色々と悪かつたな」

「また運命の導きがあつたが時会いましょうね」

そう言い残してランスとヘルも後を追つていった。

「いやはや・・・まさか魔王の仲間がある一人だつたとは・・・。」

驚いたようにスレイスは言つた。

「知つているの?」

ナイアの問に「ええ」と頷いてスレイスは語りだした。

「『魔女』のヘル、『武装王』のランス、どちらも『神』の部類に入る魔法使いですよ。」

「『神』の部類?」

「簡単に説明しますとね・・・私たちの組織は五つの部類に力を分けているんですよ、一番下の部類を『地』、次に弱い部類を『人』、次を『王』、次を『天』、そして一番強い部類を『神』とね。私の部類は『天』で、焰は『王』でした・・・単純に計算するとあなた方の部類は『人』ですね。アルマさんも『天』でしょうね」

その説明を聞いた三人はいかに自分達が弱い存在なのかを唇をかみ締めながら知つた。

「しかし驚きましたよ・・・まさか三人の『神』の部類の人たちがたつた一人の少女を守つてゐるんですから」

「えつ! ? ルークも『神』の部類なの?」

「ナイアさん何言つてるんですか? 私をやすやすと倒した魔王が『神』じゃ無ければ何なんですか?」

「それもそうね・・・でも待つて・・・じゃあ『神』の部類が三人

もいるんだつたら簡単に貴方のいた組織が潰されちゃうんじゃないの？」

「それは無いですね、私のいた組織の創設メンバーであり組織の名前ともなつた『人魔六神』がいますからね」

「那人魔六神って？」

「コードネーム、一之神、二之神、三之神、四之神、五之神、六之神と呼ばれる最強の猛者達です。詳しい事は『天』の部類である私には教えられませんでしたが、どうやら名前のどうり人と魔物で構成されていてその実力は圧倒的だとか・・・。」

「要するに・・・化け物集団って事ね」

シルフィイが起き上がりながら言つ。

「そうですね・・・ああでも組織の名前とこの事はあまり喋らないでくださいね。」

とスレイスも言う

「それよりも早く行かないと・・・戦闘が始まつてからもつ結構経つてる。」

ラウの言葉に促されるように、ナイアとシルフィイは額きスレイスは頭を搔いて少し笑いながら駆けて行つた。

そしてラウも走つていつた。

戦闘から一十分後、まだ両者の戦力は拮抗していた。何人かの兵士はゾンビに囲まれ苦戦を強いられているようだがアルマの鬼神の如き戦いぶりがそれを補っていた。

そしてアルマは現在七体のドラゴンゾンビと戦闘を行っていた。

ドラゴンゾンビはプレスなどの特殊な攻撃こそ出来ないものの巨大な身体を生かした突進などにより少々厄介な相手となっている。

アルマは七体のドラゴンゾンビを見据え額の汗を拭っていた。

「やはり・・・敵の数が多くすぎるな・・・」

そう言つて炎槍を力強く握り締めると炎槍は呼応するかのようにそのままに業火を宿した。

そしてアルマ自らにも炎を纏い上空へ飛んで行つた。

アルマの身体は金色の炎により鳥の様な姿になりながら上空へ舞い上がつていく。

その金色の炎の鳥を見た兵士達は皆一斉に歓喜の声を上げ士気が上がりつていく。

「オオオオオオ！！朱雀炎翔閃！！」

雲に届くかと言つたところで金色の炎の鳥旋回し地面へ向けて加速していくた、そして怒号とともにドラゴンゾンビのいるところに突っ込んでいった。

一瞬の閃光の後に大気が焼かれ大地が焦土と化した、もちろんその一帯にいた数百のドラゴンゾンビを含めたゾンビは何が起こったのかも分からぬまま灰塵と化した。

その場に残つたのは赤く焼かれた大地と熱い空気と小さなクレーターの中心にいるアルマだけだった。

「先ほどどの技があのアルマという男の一つなみの由来にもなった、神技朱雀炎翔閃か・・・。あれは俺の無限武装でも防げそうに無いな」遠くから先ほどどの光景を見ていたランスが唸るよう言つた。

ヘルも「そうだね」と頷いていた。

この二人は一応加勢に来たのだがティアスが傷を負った恨みとアルマの戦いを見てみたいと言う気持ちからずっと眺めていた。ティアスは傷が響いたらしく近くで横になっていた、そしてその隣には必死にティアスを看病するリーンの姿があった。

仲間と主以外を攻撃目標とするゾンビはもちろん少し離れたところにいた四人の下にも来たのだが全てランスの作り出した影の戦士達によつて倒されていた。

不意に戦場の兵士達がいない場所から鎌風が巻き起こり砂煙をたてながら数体のゾンビ達を切り裂いた。そして続くよつに水と氷の奔流がゾンビ達を押しのけ、そこから四人の人影が現れた。

「おっ!? ティアスの知り合いは魔法使いだったのかヘル?」

「あれ言つてなかつたけ? ティアスつてば、あの風と氷の魔法を使つた子と同じ魔法学校に通つてたのよ」

「ほお〜・・・最近の魔法学校つてのはレベルが高いんだな」ランスの感心したような口ぶりに「あの子達は特別なのよ」とヘルが言葉を付け足した。

「特別かあ・・・確かに頑張れば俺たちとはいかないまでもアルマの神具無し状態と互角になれそうだな」

どうやらランスは二人のことが気に入つたらしくずっと目で追つていた。その様子にハーアーとヘルは深く溜息をついた。

「んで・・・これからどうする? ずっと此処にいるつていうのも駄目だろ?」

「そうね、とりあえずティアスがちょっと回復したら姫様の護衛を任せて加勢に行きましょ」

そしてランスとヘルの二人はティアスとリーンを優しく見てお互い軽く頷いた。

「皆さん、そんな様子じゃ加勢に行く前に死んでしまいますよ？」

軽い口調でスレイスがシルフィィ、ラウ、ナイアに問い合わせる。シルフィィとラウはスレイスを睨むことで答え、ナイアは苦笑いでゾンビを迎撃していった。

「あのよ・・・こいつ等いつたいどの位いるんだ？」

ラウがゾンビを小さな氷のドームに閉じ込め凍りづけにしながら問い合わせる。

「ゾンビの事ですか？あはは、こいつ等は作り出している奴を倒さない限り永遠に出てきますよ」

その答えに三人は攻撃の手をいつたん中断し驚きながらスレイスを見た。

「それって、倒しても意味がないってわけ？」

「意味がないわけではないですよ？ゾンビを作り出すのにだつて多少魔力を使いますし、ですがそこまで使うわけじゃないですからほぼ永遠に出てきますよ。それが彼が『死靈使い（ネクロマンサー）』と呼ばれている由縁ですから」

スレイスは彼がの部分を親しみを込めて言つたのをナイアは聞き逃さなかつた。

「スレイスさん、貴方もしかしてその方と知り合いなんですか？」

「知り合いも何も彼とは何度も一緒に戦つたし、それに数少ない私と戦つて生き残った相手でしたからね、友と呼んでもいいくらいですよ」

何の悪びれも無くスレイスは愉快そうに答える。

「炎よ、敵をなぎ払え」

続けて詠唱をすると炎が現れゾンビを一気に駆逐する。

「さてと・・・厄介なのは死靈使いではなくその上司なんですよ、多分今回の作戦の指揮はあの方が出していると思います。」

「あの方って？」

「普段は気が抜けているので作戦の現場には必ず遅れて来るのですが、作戦現場に到着したら最後こちらが皆殺しになってしまふ様な方です。」

恐ろしいことを淡々と言つスレイスに呆然としつつ事態の危険性に気付いた三人はスレイスの炎が残っているうちに進んでいった。

一方敵側の本陣では死靈使いであるドーオンが上司の到着が遅いことに困っていた。

「はあ・・・ゲイドさん遅いよ、このままじゃ僕のゾンビ達がどんどんやられてここまで敵が来ちゃうよ」

そしてドーオンは詠唱を始める。

「悩める魂たちよ、我が声を聞き入れ死を恐れぬ兵士となれ」とすると地面からゾンビが数十体出現した。

「行けゾンビ達、一人でも多くの人間を道連れにするのだーー」そしてゾンビ達は兵士達の下へ向かつて行つた。

そこに影で何かが移動をしてきた、警戒をして剣を構えたドーオンだつたが現れた人物の顔を確認し安堵した。

「遅いですよゲイドさん、さて一気に巻き返しましょうか」そして戦場は激化する

## 第十六幕

「うう・・・リーン?」

横たわっていたティアスが始めてみた光景はリーンの横顔だった、必死にこちらに呼びかけている顔がいとおしくて愛らしくてずっとこのままいたいと思った。だが戦場はそんな時間さえも許さずその爆音にてティアスを我に帰させる。

ゆっくりと起き上がるティアスに気付いたのかヘルとランスも近づいてくる。

「おいおいティアス大丈夫か?」

ティアスは額に汗を浮かべ無理矢理笑顔を作つて答える。

「ちゃんと魔法は使えるの?」

ヘルの言葉にティアスは魔法を唱える、すると影は実体化しティアスの指先に導かれるように動いた。

「とりあえず使えるみたいね・・・ティアス、貴方はここでお姫様を護つていて、私とランスはレーデンの援護に向かうから」  
ティアスは「俺も行く」と目で訴えたがヘルは首を振つて横目でりんをチラリと見ると

「貴方の大切なものは何?」

その言葉にティアスは口を結んで小さく「わかつた」と言った。

「じゃあ私たちは行くからね、しつかりお姫様を護るのよ」

「やばくなつたら俺等をすぐに呼べよ、何処からでも駆けつけてやるから」

そう言つとヘルは影の中に入つて消え、ランスはゾンビの大群に囲まれているナイア達四人の下に向かつて行った。

「リーン、離れないでくれよ」

そしてティアスは唱える。

「影よ舞え」と・・・。

スレイスはゾンビを倒しながら考え事をしていた。敵の数とこちらの戦力どう頑張ってもアルマのいるところまで行くにはかなりの時間が掛かる、そうしている間に奴が来てしまつたらどう足搔いても勝てる見込みは無かつた。

「状況は極めて悪いですね」

その時左側のゾンビが吹き飛んだ、スレイスを含めた四人は啞然としてその方向を見ていると足音が一つ聞こえてきた。

「やあやあ元気かい？」

氣の抜けるような言葉を発しながら現れた人影に四人は驚きを隠せなかつた。

「あ、貴方は・・・武装王ランス！？」

ランスはスレイスを一瞥するとシルフィイとラウを見てニヤリと笑う。

「な、何なんですか？て、敵ですか？」

シルフィイの言葉に四人は息を飲み込み身構える。

「おいおいせつかく加勢に来てやつたつていうのに酷い扱いだなあ」  
その言葉に目を丸くする四人だったが意味を理解したスレイスは声を殺して笑つた。

「それは心強いですね、では武装王周りにいる敵を倒していただけますか？」

ランスは「武装王じゃなくてランスって呼んでくれ」と小さく言ひと親指で首を搔き切る真似をしてゾンビに「消える」と言つべ。  
するとランスの影から巨大な斧を持った腕が現れ斧でゾンビ達を一閃する。

振り終えた腕は幻のように消えそれと同時にゾンビ達の身体がバラバラに吹き飛び

「こんなもんでいいか？」

軽く言うランスに改めて四人は恐怖を込めて視線を送る。そんな視線に気付かないランスはケラケラと笑つてゾンビ達の死体を踏みつ

けて歩いていった。

その頃ヘルはある男と向かい合っていた。

「ふつふつふ、魔女よ我に勝てると思っているのか」

男はヘルに向けて槍を取り出す、ヘルは不敵な笑みを浮かべて男に影で作った短剣を向けてこう言い放った。

「あらあら、流石は『雷神』の一つ名を持つゲイドね。でも倒せなくともランスがここに来るまでの時間稼ぎなら出来ると思うわよ?」そしてヘルは影の短剣をゲイドに向け放つた、一本だつた短剣が次々と分裂し十六本となりゲイドを襲つた。だが槍を軽く振り回し短剣全てを消し飛ばした。

しかしその行動を予測していたヘルは短剣を両手に持つてに懷に潜り込もうと踏み込もうとする、ところが踏み込もうとした足場に一筋の雷撃が放たれる、がヘルは避けようとするどころか更に速さを上げて踏み込み雷撃の速さを超える事避けた。感心したように口元を吊り上げたゲイドだつたが慌てた様子も無く詠唱を始める。

「集まり、纏われ、雷光よ」

すると持つていた槍が青白く光だす、その時にはヘルの刃がゲイドの眼前にまで迫つていた。ゲイドはいまだ慌てた様子も無く地面に槍を突き刺す。するとヘルは足に違和感を感じる。

「なつ!動けない・・・。」

ヘルの足はまるで地面に縫い付けられたように動かなくなつた。攻守は逆となりゲイドは槍を突き出す。ヘルは地面に手を当てるといり込むように影の中に隠れた。

「隠れても無駄だ、我が<sup>らいしん</sup>雷震を受けたその足には蜘蛛の糸のような電撃が纏わり付いているのだからな」

そして雷撃が地面に向けて放たれる、だがその先には地面は無く雷撃は飲み込まれる。と同時に辺りを眩い閃光が包み込むのと同時に

影からボロボロになつたヘルが現れる。

「ぐう・・・。やつてくれるじゃない・・・。もういいぶち殺すつ

！」

そしてヘルは小さく呟く

「ごめんね、ティアス、ランス、封じたはずのこの力を使って・・・。そしてお姫様、今からの私の姿を見ないでください・・・。」

そしてヘルは声高々に詠唱する。

「闇の淵に封印せし魔女の力の解放を私は願う・・・来なさい、三年の時を経て忌まわしき魔女の力よ」

言い終えたヘルの目には涙が宿っていた、そして一瞬の沈黙の後何かに耐えかねたように首につけていた逆十字のネットクロスの中央についていた黒い結晶が砕け散つた。

## 第十七幕

黒い雲が戦場の上空に渦巻き始める、その様子はまるでこれから起る災厄を予兆しているようだつた。そしてその雲を見上げたランスが小さく呟く。

「ヘルの馬鹿野郎……」

そして四人を護衛するワансの攻撃が一段と荒々しくなつた。

「あの大戦を治めた『崩壊の一週間』を作り上げたという三人の人の魔女、少々弱すぎてがっかりしていたのだがやはり力を隠していたか、これなら楽しめそうだな」

ゲイドは口元を歪めながら黒い瘴気に覆われているヘルの方向を眺めながら呟いた。次第に瘴気は消え失せ一人の女性が立っているのが見え始めた。が、ゲイドは現れた女性、ヘルを見て驚きと苦笑を織り交ぜた顔でヘルの肩に目をやつた。肩には引き締まつた身体をした黒猫が一匹座つていた。

「ね、猫如きにあの大層なセリフを……長つたらしい謝罪を呟いていたのか、ア、アハハハハッ！」

堪えきれないと言つた様子でゲイドは爆笑し始める。

「我を猫と愚弄するのか？人間風情が、少し恵まれた性能があるだけでつけあがりおつて……」

少しトーンの低い声が辺りの空気を震わせて響く、その声はゲイドのものでもヘルのものでもなかつた。

「誰だ？」

ギロリと周りに睨みを聞かせるゲイドだつたが周りには一人以外誰もいない。周りを見ているうちに不意にヘルの肩にいた黒猫と目が合い、黒猫がニヤリと口元を吊り上げる。

「何が人間風情だ、下等な猫がっ！！」

叫ぶと同時にゲイドが駆け出そうとするのをヘルが影の短剣を足元に放つて牽制する。同時に言葉をつむぎ出す

「私の召喚に応じていただきありがとうございました。」

その言葉は二つの意味を持つていた、一つは黒猫に対する敬意、もう一つはゲイドの無視及びもはや眼中にないという無言の圧力

「形式的な言葉はよい、して今回が一度目の召喚となるが、お前の決心がついたと考えていいのだな？」

しっかりと頷くヘル、この光景を黙つて見ていたゲイドは一人のやり取りに何故か悪寒が走った。

「フ、フハハ・・・震えが止まらぬわ、待っていた、待つていたぞこの感覚、人魔六神の一之神にやられた肩の傷が疼くぞ・・・。

「では、確認するぞ。我との契約前回の時はお前の器としての力を見ると言つことで一週間の間のみしか我が力の全てを宿らせることは出来なかつた。だが今回は完璧にその身体に我が力が宿ることとなろう、それは前回とは違い一生の間力を宿らせることとなる。だがそれにともない前回一週間の間だけだつた破壊衝動、殺人衝動そして精神汚染が一生お前について回ることとなる。それを理解したうえで力を求めるならば、契約の言葉を言つがよい」

すると一呼吸置いてヘルは言葉を紡ぐ

「この世の狭間より来たりし奈落の化身よ、その貪欲なる意思と力を我に与えたまえ。」

そしてヘルを中心とした半径五百メートルの世界が、空間が暗転した。

影を操りながらティアスは自分の首に付けてある逆十字のネックレスが怪しく光つてゐるのに気付いた、思い当たることはたつた一つ

だけ、ヘルかランスかその両方が召喚を行つたという事だ。幸い背に隠れているリーンにはネックレスが見えていないらしく気付いていない。

だけど・・・召喚をするつてことは、かなりやばい状況に陥つているつてことか・・・

そして頭の中にひとつずつ単語が浮かび上がる

#### 『崩壊の一週間』

これは三人の罪、自分の使つてはいる力を制御し切れなかつた過去の

自分の象徴、そして消えることのない傷跡

そこまで考えてティアスはギュッと歯を食いしばる。

「三年前には扱えなかつた力、一度と使わないと決めた力、もしそれが開放されるんだとしたら俺は・・・ヘル、ランス、あんた達をリーンの敵と見なして殺さないといけないよ」

その声はいつものような霸気がなく、歳相応ともいえない幼い言葉で、とてもとても弱いか細い声だった。

ふと背後でリーンの温もりを感じる、それが満身創痍のティアスのエネルギー源であり唯一無二の心の拠り所だった。そして少し気が飛びすぎて影が思つたとおりに動いていなかつたのか数体のゾンビがすぐ近くにまで迫つてきた、それを足元から出た影の針が刺すのではなく難いで弾き飛ばす。

「やっぱりさどんなものを捨てても一番だけは護りたいんだ、大切なものはそれこそ星の数ほどあるし誰も本当は殺したくない、昔の俺はこんなことなんて考えもしなかつたのにな。」

その言葉は周りにいるリーンやゾンビに当てられたものではなかつた。

「ああ、確かに昔の俺は本当に弱かつたさ、それこそ一般人と変わらないほどにね。なあゲオルド、俺は君と言う力を手に入れたからこそこんな事を考えるようになつたし、少し前までは君の身体を剣という形にして使つていたから君を身近に感じていたんだと思う。それでも君は一番じやなかつた、だつて一番は彼女つて決まつてい

たからね、だから俺は一度君を捨てて彼女の為に頑張ったんだ。確かに君という最大戦力を失ったのは俺にとつても苦しくて悲しくてとても辛かった、でもそれ以上に彼女との約束を護ることが俺には意味があるように考えられた……でも、いつからだろうな自分の力不足に嘆き始めたのは、魔眼と称されるこの闇の瞳に更なる力を求め始めたのは、ホントにきっかけは偶然だったね。勝てるはずのない戦い、倒れていく仲間だった人達、こんな極限の状況下だつたからこそ全てを犠牲にしてでも生きたいって思つたんだと思うね。だってそうじゃなかったら本当の君を姿を見ようと考へることはなかつたと思うからね。で、あの時から俺には罪を背負う為の二つ名が付いたんだと思う『魔王』っていう二つの名がね。なあゲオルド・・・君はどう思う？剣であり固有の個体である君が返答してくれるなんて思うほど流石の俺も狂っちゃいない、だけどもし今の俺の考え方を聞いて答えてくれるとしたら君は何て答えるかな？この『全てが欲しい、そのため力を使いたいけど一番がそれを嫌つていい』なんて他愛ない質問をさ・・・。

一人で話し続けるティアスに不安を感じたリーンはティアスを振り向かせようと肩に手をかけた、ところがティアスはいきなり不気味に笑い始めた。

「クックク・・・そうだよね。剣には意思がない、だがそれを振るう者そのものの意思こそが剣の意思、単純なことだけどすぐ忘れる。なら俺はもう迷わないよ。善も惡も関係ない俺の前、俺の前に立つてはいる全てのモノが俺の破壊対象なんだよね」

そこまで呴き終わるとティアスは振り返りリーンの額に指をつける。「リーン・・・少しの間だけ目を瞑つてくれ」

そしてリーンの反論を聞かないうちに指先は淡く光りリーンは眠つた。

「さてと、答えはもう出した。俺は君と同じで強欲で掴みきれないつて分かつていても掴んでしまうからね、じゃあ来てくれ魔剣『ゲオルド』」

するとトップと水に何かが落ちるような音とともに影から一本の漆黒の両手剣が現れた。

俺の予想ならランスは召喚なんて馬鹿な事はしない、ランスもきっと気付いてるその時になつちにいる奴らにリーンを任せて、二人でヘルを止めに行くつ！！

そこまで考え両手用の剣である魔剣を片手で振り上げる、その動作の途中に物凄い量の魔力が刀身の玉の一つに注がれた、そして刀身についている小さな玉の一つが紫に淡く光る。同時に振り上げた魔剣を強引に地面に振り下ろす、その瞬間魔剣の先端から黒い三日月型の衝撃波がゾンビ達を蹂躪する。一瞬の沈黙の後その場には荒々しく地面が抉れた後しか残つていなかつた。

「魔撃二式・・・。」

小さく咳くと傍らに眠らせたリーンをまるで割れ物を扱うように優しく抱きこみランスのいるであろう場所に走つていった。

「じょ、「冗談じゃない・・・情報じゃ魔王は傷だらけって聞いていた。それなのにたつた一振りで僕のゾンビ達を駆逐してしまって・・・。」

遠くの方でゾンビの視界を通してティアスを見ていたドニオンは唸るように言った。

「しかし何なんだあの剣？あんなの魔王のデータには載つていなかつた・・・！？もしかしてあれが『崩壊の一週間』を作り出した・・・たつた五十人の魔法使い達が組織に敵対する国の一萬の軍勢との交戦で戦力差を一気にひっくり返したと言われる三人の中で最強称される魔王の秘密なのか！？」

そこまで考えてドニオンは思考を中断させる。

「人魔六神に応援を求めるべし・・・こちらが負けてしまうかもしない・・・。」

そこまで考えドーオンは一体のゾンビに走り書きした手紙を渡し影で組織に送つた。

「しかしこれで分かるかもしれないな・・・何故あの三人が闇系統の魔法使いの中で群を抜いているのか、これが分かれれば僕の実力も神に近づけるかもしない・・・」

そしてドーオンは醜悪な笑みを浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8468c/>

---

『エデン』～三つの瞳～

2010年10月11日21時17分発行